
藤原の陰謀～筆休め～

ますたぁ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藤原の陰謀〜筆休め〜

【Nコード】

N7494K

【作者名】

ますたあ

【あらすじ】

これは藤原の陰謀の章の合間に書いていました、藤原の陰謀のその後です。

SOS団と佐々木団が合同で不思議探索を行うのですが……。メイン視点はキヨンですが、途中視点が変わることがあります。

原作ネタばれを回避されたいことは読まれないようにお願いいたします。

第1話（前書き）

この作品は08年09月10日～08年11月02日にmixiのコミュニティ『涼宮ハルヒ』で投稿し、日記で加筆したものを含め、

改めて『涼宮ハルヒのSS』コミュで09年04月12日～年04月21日にかけて転載したものです。

あらすじにもある通り、藤原の陰謀のその後となっております。

第1話

ある日のことである。放課後のチャイムがなり習慣のように足がいつもの場所に向かう。

しかし、今日に限ってその足取りは思いなげならこれから待ち受けることがおぞましいこと間違いなしだからだ。何事ないようにつて……無理だよな――。

「ただいまよりSOS団合同会議を始めます!!」

というわけで、ハルヒの発案によりここ北高の文芸部室……基、魔窟とかしたSOS団本拠地に橘率いるSOS団を俺が呼び出し、これから会議が行われようとしている。ちなみに我々が団長はいつもの席を陣取り、ハルヒから見て左側が我家SOS団で手前から古泉、朝比奈さん、長門、俺となる。

右側は橘率いるSOS団で手前から橘、佐々木、周防、藤原となる。

しかし、未来人・宇宙人・超能力者に神が二人づつ、一般人である俺はますますいづらいぞ。

「お茶をどうぞ」

ありがとうございます、朝比奈さん。手伝わなくていいんですか？

「いえ、こんなに大勢だと作りがいがあります」

「みくるちゃん！おかわりちょーだい!!」

せっかく朝比奈さんが入れてくれたお茶をもう少し味わって飲み！ありがたみもないやつだ!!

「あら？あたしは充分味わっているわよ？キョンこそ鼻の下伸びてるわよ」

そんなことはない！大体な……。

「夫婦ゲンカは僕らが帰ってからにしてくれないか？時間の無駄だ」

「そうです。キヨンさんに呼ばれて皆で来ましたが一体なんなんですか？」

夫婦ゲンカとは聞き捨てならない。それに俺らはまだ夫婦でも何でも無いぞ。

「くくつ。キヨン、君のその否定の仕方ではますます肯定に聞こえてしまうよ」

佐々木まで……。

「はい、そこ！無駄口たたかない！！青春は待ってくれないんだから！！」

「お前が……」
あんた

とツツコミが珍しく被ったと思ひ声をする方を見ると未来人がこちらを見ていた。ふん。っと目を反らすのもシンクロしていたらしく、向かいで佐々木がくくつ。と笑っていた。古泉もいつもの爽やかスマイルでこつちを見ていた。気持ち悪いからお前ら前を向け。

「今回の議題はあたしの許可なくSOS団の名前を使用してるんだよ！！あんたどういうつもり！？」

「ハルヒさん！勘違いしないで下さい！！あたし達は……」

橘がSOS団の正式名称を説明していた。ニュアンスは違うが略称は同じである。

「そついうのは、著作権法に引つかかるのよ！！」

いつSOS団は商標登録したのかとツツコミを入れたところだが、また未来人と被りかねないのでやめることにした。

その後、ハルヒと橘は相変わらずケンカをしてるし、古泉と佐々木はそれを楽しそうにニコニコ観戦しながらチェスをしていた。周防と長門は見つめあったまま動かない。お前ら不気味だそ……。

朝比奈さんはオロオロし、藤原は呆れて勝手に文芸部室の本を読み始めた。おい、部外者が勝手に文芸部のものに触るな！この場合俺もだろというツツコミはなしだ。

やれやれ。ここは俺の出番か。

結局、ハルヒと橘の仲裁に俺が入り、いつのまに本を読んでいた

のか長門がいつもの終了の合図でこの日の会議は終了した。会議と呼ぶには程遠い内容だったがな――。

下校時にはさっきのケンカはどこへやらハルヒと橘は仲良く話をしながら先頭でハイキングコースを降っていた。いつの間にか佐々木と古泉は打ち解け何やら話をしているし、長門と周防は相変わらず無言だが、テレパシーで会話でもしてるのか？

朝比奈さんは一番先頭の二人も加わり仲良く三人で話をしている。俺はだということ……。

「あんたもずいぶん大変なんだな。よくやるよ」

なぜ、俺はお前と一緒に帰らなければならんだ？

「仕方ないだろ。あまりものなんだから」

あまりなら朝比奈さんもだろ。

「僕はきらいだね。あんたもな」

そいつは奇遇だね。俺もあんたが嫌いだ。

「ふん。珍しく意見があつたね」

全くだ。そんな会話をしながら甲陽園駅まで来ると、ハルヒはとんでもないことを言い放った。

「じゃあ、土曜日はあたし達はいつものところに集合ね!!」

また不思議探検ツアーか？

「そう！今回は合同で行うわよ!!京子の家の近くでね!!」
なにっ!?!ちよつと待て!!何をいきなり……

「いいですね」

古泉お前は何を……。

「くくつ。彼女は相変わらず興味深い人だ。僕もぜひ参加を希望するよ」

佐々木まで乗り気に……。

「わあ、鶴屋さんも呼んでいいですか？」

「構わないわよ、ぜひ呼んであげて!!」

朝比奈さんまで……長門は……。

「構わない」

「楽しそう——」

周防まで……。

「やれやれ。どうやらあんたの意見は受け入れてもらえないみたいだな」

同情感謝するよ。出来れば変わってくれないか？

「遠慮しとく。そんなポジション誰も頼まれてもやらないよ」

だよな……かくして俺達一行は不思議探検合同ツアーを開催することになった。今回ばかりは奢りたくない俺だが、1時間前に着いたのに最下位だったのは言うまでもない。

第2話

ハルヒの発案によりSOS団合同不思議探検ツアーが開催されることになり、ビリの俺はいつもの倍の値段を奢ることになった。

「ホントっ本部団員が遅れるなんて怠慢よ！始末書ものだわー！」

1時間前に来て遅刻で始末書とはずいぶん酷いものだ努力は認める。

「大事なのは結果なのっ！努力しても結果が伴わないことがあることを覚えて置きなさいー！」

やれやれ、一体お前達は何時に来てるんだ？

「くつくく、キヨンも大変だね。でも、女の子を待たすのは男としていかなものかと思うね。古泉くんは一番先に来ていたよ」

古泉一体何時に来てたんだ？

「遅刻した上に無駄口を叩くなんていい度胸ね？罰としてお昼もあなたの奢りー！」

「アハハ、弱り目に祟り目とはこのことさねっ」

鶴屋さん笑い過ぎです……。

SOS団+佐々木、鶴屋さん一行は橘の住んでる街へ電車で移動した。駅に着くとすでに三人は待っており、真ん中でこちらに笑顔を振り撒きながら手を振る橘と両サイドに長門より無口な周防に、明らかに乗り気じゃない藤原がいた。

「団長を支部員全員で出迎えるとは優秀ね。バカキヨンをそちらにやろつかしら」

何バカなことを言ってるんだ？

「涼宮さん、それでは橘さんたちに迷惑がかかってしまいます。彼は団長自ら指導されるべきでしょ」

「そうねっ！キヨンの自覚のなさはおたししか鍛え直せないわね！さすが古泉くん副団長らしい洞察力ね！」

「恐れ入ります」

そう言つて古泉は俺にウインクを投げて来た。野郎にウインクをもらつても気持ち悪いだけだ。

さすがに俺の財布で皆に奢るとなると良いものは食べれないだろうと、佐々木の提案でお昼はファミレスになった。しかし、それでも10人分だ……野口どころか諭吉が一発で飛ぶな、等と財布の中身を確認していると誰かが俺を引っ張る。

振り返るとそこにはすまし顔の未来人が……何か用か？

「相変わらず無様だね。あんたも学習して早く来ればこんなことになるのに」

1時間前に着いて遅刻なんだぞ？

「遅刻は遅刻だろ？前日からテント張つて泊まればいいんじゃないか？くくつ、滑稽だな」

人のテントで寝てる姿を想像して笑うな忌々しい。皮肉を言いに来たのか？

「ふん、そんなに僕はねじ曲がつてないよ」

そう言つて俺にカードを手渡した。

「使え。どうせ今日はあんたの奢りになりそうだしな」

カードは俺が見たことのないいかにも高そうなカードだ。どうしてお前が持つてるんだ？

「それは禁則だ。だが、今日の全員分の奢りなんかはした金だ。あんたには借りがあるからな」

そう言つてカードを押し付けた藤原は前を歩いていった。

あいつ確か同じ歳だよな？未来人なのにどうやってカード作るんだろ？身分証明書偽造か？いや、これが偽造カード！？あいつならやりかねない。

「あれれ？キョンくんそのカードどうしたによる？」

あつ 鶴屋さん。

「そのカード。この銀行の大株主さんしか持てないカードなんだよねっ？」

そうなんですか？

「キヨンくんは株の才能があつたなんて知らなかったっさ！有希っ
こに手伝ってもらったのかい？今日は安心して奢られるさっね！」
そう言つて鶴屋さんも前の集団に戻つた。とりあえず、お金の心
配はなくなつたがカードが気になる。まあ、後で橋辺りにでも聞く
か。

「コラッ！キヨン！！せつかくファミレスにしてあげるんだから早
く来なさい！！」

やれやれ。団長さんが呼んでるから急ぐとして、ファミレスでは
食べすぎを注意するか。やつら奢りならなりふりかまず食いそうだ
し。カードはもしもの時に使わせてもらつとしよう。みんなの後を
追つて俺はファミレスに入つた。

第3話 無組

ハルヒ、長門は相変わらずの食欲だが、ここに九曜が加わり次々とテーブルに並べられた料理が消えて行く。鶴屋さんはその食べっぷりを見て大笑い、橘は驚愕していた。

佐々木はちゃっかりデザートまで食べていた。

「いつも来てるからね」

なるほどだから要領がいいのか。

朝比奈さんは相変わらず草食動物のようかわいくチマチマと食べているが、三人の食べっぷりに圧倒されて、結局残ったのをハルヒに食べてもらっていた。

古泉もしっかり食べ、食後のコーヒーが何とも似合う。藤原にいたってはコーヒーだけしか頼んでいない。「口に合わない」らしい。まあ、俺は大助かりだがな。それでも、諭吉2枚飛んだのはおかしい！ファミレスに10人入ってどうして諭吉先輩が2人もいなくなるんだ？

正しく言つと、諭吉さん1枚、一葉さん1枚、野口さん5枚だ。

おかげ今月のお小遣い＋貯金は全てパーだ。まるで徳川家康が秀頼の力を削ぐために寺社建立修理をさせたみたいだ。その内、釣り鐘の銘文にいちやもんでもつけるんじゃないのか？。

そういえば、会計の際に橘が近づいて来て

「キョンさんTカード持ってます？」と聞いて来た。

俺が「持っていない」と言つと

「じゃあ、あたしのカードにポイント入れて下さい」とカードを手渡された。

ちゃっかりしてるな。しかし、食べた分を何%がお金に代わって使えるなら俺も持つことを検討するか。今まで面倒くさくって持つてなかったからな。

さて、食事が終わる時に班分けをしたわけだが

「今回は10人だから3・3・2・2で分けるわよ！四方に散らばって一気にこの市内の不思議に逃げ場を与えず一網打尽にするわよ！！」

と何とも訳の分からない計画が発表されハルヒがクジを作っていた。

もちろんいつものつまようじだ。10コ使うとは環境に悪いな。

そんな大切な地球資源に感謝しつつクジは出来上がった。

今回は4組というわけで、

赤

青

黒

無

と色分けしたらしい。

結果は……

赤——橘 古泉 朝比奈さん

青——鶴屋さん ハルヒ

黒——藤原 九曜

無——俺 佐々木 長門

となった。

「じゃあ、これでひとまず散策して！何か見つけたらすぐ団長のあたしか支部長の京子にすること——！」

橘もいつのまにか右腕に『支部長』と書かれた腕章を付けていた。イヤじゃないのか？

「ハルヒさん……いえ、団長命令なんで……」
御愁傷様です。

「良い！キヨンー！！デートじゃないんだからね！？有希！キヨンが
佐々木さんに何かしたら懲らしめてやってー！！」

「御意」

長門。目がマジだぞ……。

「安心して涼宮さん。キヨンにそんな度胸はないから。もっとも中
3までの僕の知ってるキヨンは、だけどね」

何だそのウイंकは？不覚にもかわいいと思ってしまったじゃないか……。

「とにかく！！集合時間は17時にここよ！それじゃあ解散！！」

と言うわけで解散となった。

俺たちはハルヒに命じられ駅前の西側を搜索することとなった。

因みに

赤は南で

青は東

黒は北だ

何か意味でもあるんだろうか？

「おそらく五行が関係していると思われる」

俺の右側を歩く長門がそう呟いた。

「なるほど。確かにピッタリだね」

左側にいた佐々木が頷く。

待て。分からないのは俺だけか？

「くつくつく、君は知らないのか？普段から五行と言えばよく使っ
てるじゃないか？君が嫌いなものだよ」

俺が嫌いなもの？

「そうだ。君が嫌いなものはなんだい？」

授業は嫌いだぞ、後あのハイキングコースも嫌いだ。

「健康的で良いじゃないか。僕は毎日満員電車だよ」

佐々木は肩をすくめて答えた。

「だが、いい線を言っている。学校は関連するよ」

学校で五行？国・数・英・理・社か？

「くつくく君は相変わらず鋭いね。全て嫌いなのかい？」

出来れば遠慮したいものだな。

「五行とは、木行・火行・土行・金行・水行のことを言い、方角や色、四季に当てはめられ陰陽等で使用された」

まるで痺れを切らしたかのように長門が答えた。

なるほど、つまり曜日にも使われているということか。

「そう」

「さすがは長門さんだね。今回の場合は駅前が中心で黄色、東は青・西は白だから無の僕ら・南な赤・北は黒となったわけだ」

「この色は方角にあてはめられ、東は青龍・西は白虎・南な朱雀・北は玄武と四神を表している」

「つまり今回、僕らは白虎ということだ。そういえば、北原白秋と言う詩人がいるだろ？彼の白秋はこの五行からとられたんだよ」

「東は青で青春・南は朱夏・北は白秋・西は玄冬と四季を表す」

両サイドから辞書のような解説をされ俺の耳は終止閉じたくてしたかなかった。

その後も九曜の名前の由来に広がり、ついには戦国時代の軍師のあり方まで話しが広がった。長門の情報量はまさに動く電子辞書だが、その長門に付いていつてる佐々木はまさに人間広辞苑だ。こいつの凄さを改めて見せつけられた。

その後も二人の語り合いは続き、俺は終止飛び交う言葉の意味も分からないまま前の障害物に注意をしながら歩いていた。挟まれると賢くなったって錯覚に陥りそうだな。

結局このままただあてもなく歩き、二人の話を中断し集合場所へ向かった。

こいつらずっと話せれそうだな。この役目は古泉に譲るべきだったな……。

第3話 青組

今日はSOS団合同不思議探検ツアー！キヨンの奢りでお昼を食べた後、四方に分かれて搜索することにした。

くじ引きをしたんだけど結果は……

赤——京子 古泉くん みくるちゃん

青——鶴屋さん あたし

黒——藤原くん 周防さん

無——キヨン 佐々木さん 有希

佐々木さんはキヨンと一緒に……。

「じゃあ、これでひとまず散策して！何か見つけたらすぐ団長のあたしが支部長の京子に連絡することー！」

あたしが話してるのにキヨンは京子とひそひそ話をするなんて……。

「良い！キヨン！！デートじゃないんだからね！？有希！キヨンが佐々木さんに何かしたら懲らしめてやってー！」

これってやきもちなのかな……。

「安心して涼宮さん。キヨンにそんな度胸はないから。もっとも中3までの僕が知ってるキヨンは、だけどね」

佐々木さんはあたしの知らないキヨンを知ってる。二人何か信頼しあってるもんね。

いいな、あたしもあなりたい……。

「とにかく！！集合時間は17時にここよ！それじゃあ解散ー！」
あたしは鶴屋さんと青組だから東側を搜索することになった。

と言つても……。

「によるー！めがっさかわいいじゃないかー！！」

「ここはあたしの好みとピッタリの服があるさねっ！」

などと鶴屋さんが雑貨屋さんや洋服屋さんに入るのに付き合っていた。これって買い物よね？まあ、楽しいからいいんだけど……。

あたしは一つのわだかまりを抱えたまま鶴屋さんとの買い物を楽しんだ。

「いや、不思議探検ツアーなのに買い物ツアーになっちゃったによる」

あたしたちは歩き疲れたので喫茶店に入って休むことにした。

「ハルヒにゃんは何も買わなくて良かったのかいっ？」

「え、ええ良いのがなかったからね」

「そうかいっ！中々自分にあったものを見つけるのって大変っさね！」

そんな他愛もない会話にあたしは軽い返事しか出来なかった。

しばらくして、あたしが頼んだアイスティーと鶴屋さんが頼んだカプチーノとティラミスが運ばれて来た。

「偶然入ったとはいえここのティラミスめがっさ美味しいよ！ハルヒにゃんも食べるかい？」

「え、ええもらうわ」

確かに甘さと苦味のバランスが絶妙！今度はあいつと一緒に……。

あたしの手が止まった。今ごろあいつは……。

「ハルにゃんってさ」

気が付くと鶴屋さんの顔が目の前にあった。あたしは勢い余って背もたれに腰をぶつけた。

イタタタ……。

「ハルにゃんは誰かに自分がめがっさ悩んでること誰かに相談したことないよろ？」

ぶつけた腰をさすりながらあたしは鶴屋さんの質問の答えを探した。

確かにつまらない悩みはたまにお母さんに聞いてもらっけど、真剣な悩み事は相談したことないわ。

「あはっ、凶星かいつ？」

あたしは頷いた。

「そうだろうねーハルにゃんは優等生だから自分で解決してしまうんだねっ」

す、鋭い……あたしはわからないことは自分で調べたり自分の経験から解決させる。

「でも、それは自分を納得させてるだけで本当の解決にはなっていないよ」

鶴屋さんはまるでホームズの事件推理のようにあたしの心の中を言い当てて行く。気分は悪いけど不思議とモヤモヤは晴れて行く。

「んで、今回はキョンくんが悩みの種かいつ？」

「どうして分かったの!？」

あたしは思わず大きな声を出して立ち上がってしまった。さすがのあたしでも他の人の視線を感じて恥ずかしかった。あたしはしずしずと腰を落着けた。

「かまかけたただけだったんだけど凶星だったかいつ」

「どうして分かったの？」

今まで誰も気付かなかったのに。

「顔に書いてあるによろ」

「えっ？ウソ!？」

「ウソ、鏡で見なくても書いてないによろ!」

そう言つと鶴屋さんはゲラゲラと笑いだした。完全に遊ばれてる……。あたしが立ち上がろうとすると、

「待つさっ！ハルにゃんはキョンのことをどう思ってるんだいつ？」

あたしはキョンのことを？ただの団員1はもう鶴屋さんの前では通らないだろうな。でも、人前で言つなんて恥ずかしいよ。ましてや声に出すなんて……。

「す……」

「す?」

「す……好き」

「好き!？」

「かも……」

鶴屋さんのこけようは効果音が聞こえそうなくらいだった。

「アハハハ、ハルにゃんらしいね!でも、キョンくんはそんなじや気づいてくれないによる!いつもみたいにガンガン押して行けばいいさ」

「そ、そうなの？」

「そうさ!キョンくんには押し押し押しによる!」

鶴屋さんの言葉はあたしに勇気をくれた。

「分かったわ!押し倒すぐらい押して押して押しまくるわ!」

「ホントに押し倒したらダメだからねっ!」

ありがとう鶴屋さん、あたし何かやれそうだわ!!

「もうこんな時間さねっ!集合場所に戻るによる!」

そしてあたし達は元来た道に戻った。鶴屋さん……あなたはあたしにとって大切な親友よ!

これで良かったのさ……あたしは観察者であって当事者になっては行けない。

ましてやキョンくんを独り占めにするなんて……みくるだって避けてるのに……。

ハルにゃんが羨ましいによる……。

「どうしたの?鶴屋さん？」

どうやらあたしは立ち止まってしまっていたらしくハルにゃんは不思議そうな顔をしていた。

「何でもないさっ!急ぐによる!」

あたしは駆け出した。それにつられてハルにゃんも走っている。あたしは走った。走ったらきつと未練も置き去りに出来る気がし

た。

でも、結局『気がした』だけだった……。
キョんくんのバカヤロー！

第3話 赤組

今日はSOS団合同不思議探検ツアー！キヨンの奢りでお昼を食べた後、ハルヒさんの提案で四方に分かれて搜索することになり、くじ引きをしたんだけど結果は……。

赤——あたし 彼 朝比奈さん

青——鶴屋さん ハルヒさん

黒——藤原 九曜

無——キヨンさん 佐々木さん 長門さん

まさか機関の彼と一緒にの組とは……これは佐々木さんかハルヒさんの陰謀？

さらにあたしはハルヒさんから（団長命令）とても恥ずかしいものを渡され付けさせられるハメに……。

「じゃあ、これでひとまず散策して！何か見つけたらすぐ団長のあたしか支部長の京子に連絡すること……！」

キヨンはあたしの右腕にハルヒさんに付けさせられた『支部長』の腕章に気付いた。

「イヤじゃないのか？」

恥ずかしいけど……。

「ハルヒさんの……いえ、団長命令なんで……」

キヨンさん同情の目を向けないで、逆に恥ずかしくなるから……。「良い！キヨン……！デートじゃないんだからね！？有希！キヨンが佐々木さんに何かしたら懲らしめてやって……！」

急にハルヒさんがキヨンを注意した。もしかして、ハルヒさんやきもち妬いてる？ご、誤解だよ……！だってあたしは……。

まあ、当の本人はコーヒークップをくるくる回しながら退屈そうな顔をしているけど……。

「安心して涼宮さん。キョンにそんな度胸はないから。もつとも中3までの僕が知ってるキョンは、だけどね」

さすが、佐々木さん！でも、それ逆効果……。もしかしてわざと？はあ、こんなんで大丈夫なのかな？

「とにかく！！集合時間は17時にここよ！それじゃあ解散！！」
こうしてあたしが住んでいる街の不思議探検ツアーが開始されたのでした。あたしたちは赤組なんで南ね――。

「……………」

三人分の三点リーダー。き、気まずい……。

そりゃあ、朝比奈さんはあたしたち組織が誘拐しようとしたんだし、彼はあたしがいた組織と敵対してる機関にいるんだし仕方ないけど……。

まさかこのまま機関に連れて行かれる！？

あ、あり得るかも……。

「あのお、橘さん？」

「ひゃ、ひゃい！？」

突然、朝比奈さんに声をかけられたからあたしは声が上ずるし大きいしおまけにひゃいって……。

しかも、朝比奈さん驚かせてしまった。

「クスクス。愉快な方ですね」

朝比奈さんの笑顔はまさに女神。普段、笑わない人たち（正しくいうとあまりね）と生活しているあたしには朝比奈の笑顔はキョンさんよりも2、3倍輝いて見えました。

こんな人に酷いことをしたなんてあたし……。

「朝比奈さん！あの時は本当にすいませんでした！！」

あたしは誘拐未遂事件のことを朝比奈さんに謝った。

「えっ？橘さん……何で謝るんですかあ？」

そ、そっか……朝比奈さんずっと寝てたんだ……。その状況を知らないのも無理はない。

「彼女が朝比奈さんに謝られているのは……」
横でスマイル人形化してた彼が朝比奈さんにあの時のことを説明してくれた――。

「そうだったんだあ」

「ホント、ごめんなさい！」

「良いですよ。だって今はこうして一緒にいられるんですから。きつとそれはこの時間平面上において必要なことでしょうし」

あなたはどこぞの聖人君主なんですか！慈悲深過ぎます……。

「あたしのこととはどうぞみくるちゃんと呼び下さい」

みくるちゃん……は流石に呼びづらいんでみくるさんで良いですか？

「良いですよ」

朝比奈の笑みで世界が平和になるんじゃないかって思ってたしまう。あなたは穢土に舞い降りた女神です！

「仲直り出来ました？」

こちらの彼の笑みは裏がある。まさに正反対ね。

「おやおや、敵対勢力とは言え一度は手を結んだ仲ではないですかあれはたまたま利害が一致しただけよ。どうせ目的は相違してるんだから。」

「果たしてそうでしょうか？」

彼は意味深な発言をした。

「我々が今こうしていることは涼宮さんにとっても佐々木さんにとっても良いはずですよ」

確かに佐々木さんの精神はいつもより安定しています。

「ならば、我々はこれからこの様な機会を何度か設けるべきではないでしょうか？」

その為にあたしたちも仲良くするべきだと言いたいんですね？

「その通りです。ここでは機関やら組織は関係ありません。一、団員同士として仲良く団活に励もうではありませんか。まさに青春だ」

ふにおちない感じ（特に最後）ですが一利あります。これから協同することもあるかもしれないですからね。

「世界の安定は我々も願ってますから」

こうして、あたしたちは今までのことを水に流し友達になった――。

「しかし、あなたが朝比奈さんにあのことを謝るまではと決めています」

つまり、朝比奈さんのおかげってこと？

「そうなのかも知れませんか」

彼女を挟んで会話していたあたしたちは真ん中でキョトンとしている朝比奈さん見た。

「ふえっ！？二人してな、何ですかあ？」

一々かわいい！行動ホントかわいすぎます！！ハルヒさんがおもちやにしたい気持ち分かる気がする。

「そんなあゝ橘さんまで酷いですう」

泣き顔もかわいい！この後、あたしは朝比奈さんをいじり続け、古泉くんはその光景をただ見ているだけとなり、集合場所に着いた頃にはあたしたちはすっかり打ち解けていた。

こんなんなら始めからこうすれば良かった。

でも、今からでも遅くないよねっ！

ハルヒさんありがとう！！

第3話 黒組

今日は涼宮が思い付きで考えたSOS団合同不思議探検ツアー。
僕はイヤだったんだけど朝比奈（大）が既定事項だって言うし、
カードをあいつに渡すのも既定事項らしいから仕方なく参加をしている。

既定通りキヨンの奢りでお昼になり、僕は食べる気もおきないからコーヒーを飲んでいた。

涼宮の提案で四方に分かれて搜索することになりくじ引きで組を決めた。

結果は……

赤——橘 古泉 朝比奈

青——鶴屋 涼宮

黒——僕 九曜

無——キヨン 佐々木 長門

「じゃあ、これでひとまず散策して！何か見つけたらすぐ団長のあたしか支部長の京子に連絡すること——！」

いつの間にか橘の右腕には『支部長』と書かれた腕章を付いていた。

「イヤじゃないのか？」

「ハルヒさんに……いえ、団長命令なんで……」

やれやれ、涼宮だけには関わりたくないな。

「良い！キヨン——！デートじゃないんだからね！？有希！キヨンが佐々木さんに何かしたら懲らしめてやって——！」

「安心して涼宮さん。キヨンにそんな度胸はないから。もつとも中3までの僕が知ってるキヨンは、だけどね」

まあ、観察者が楽しそうだし、始めから探す気はない。幸い九曜

が相手ならサボるのも好都合だ。

「とにかく！！集合時間は17時にここよ！それじゃあ解散！！」
こうして不思議探検ツアーが始まった。僕は黒だから北か――

しばらく、僕は黙々と歩いた。と言ってもいつも一緒にいるから特に会話もすることがないからな。

「――」
相変わらず無表情の九曜。

「楽しいか？」

僕は九曜に聞いてみた。

「楽しい――……？」

九曜がこっちを向いた。

「ああ、一応不思議探検ツアーらしいからな」

九曜は視線を前に移すと

「楽しい――……分からない――……ただ――藤原と――いると――

――エラーが――やすい――……」

「僕といったらエラーが？」

九曜は頷いた。

「上手く――言語化――出来ない――……」

九曜は少し困惑している様に思えた。

「私の――異時間同位体なら――可能かも――リミッター解除の――申請の許可を――……」

僕はあの性格に苦手意識を感じるからむやみやたらに使いたくないが、今回は九曜が原因不明のエラーを引き起こしてるんだ。

「もちろん、頼む」

「分かった――……」

僕は人気のないところへ移動し、九曜はリミッター解除の申請を天蓋領域にした。しばらくして九曜は青光を放った――。

「久しぶり〜航佑」

青光が止むとそこには勤務服が窮屈そうな九曜（大）が立っていた。面影は長い黒髪と目ぐらいだな。

「そっちの調子はどうだ？」

「毎日、しょうちゃんとさがみくの三人で情報をデータベース化してる。すし詰め状態よ」

精神的に来てるのか少し疲れも見られ元気もない。

「何か、悪いな」

「良いよ、その代わり今日は付き合ってね」

九曜（大）はそう言うなり俺の腕を掴んだ。

「じゃあ、飛ぶよ」

「お、おいTPDDの使用は……」

九曜（大）は止める前に移動を行った。でも、いつものグラツと来る感覚じゃなくジャンプし着地した感覚に似ていた。

「空間移動よ。これは宇宙人の私だから出来るの」

なるほどな。確かに風景は駅前に変わっていた。

「ホント、久しぶりだな〜前は来れなかったから」

「確かに北高だったな」

「だから、今日は色々行きたいところあるから付き合ってね」

そう言うなり九曜（大）は俺の腕を掴むと走り出した。

「お、おい……」

ホント、あの九曜がこんなになるなんて……もしかして、これがエラーなのか？

その後、僕たちは三人で行ったイタリア料理屋、大型ショッピングセンター、四人で来た南京町にも行った。

散々連れ回され、最後はあの小高い丘に来た。辺りはすでに暗くなっていた。

「集合時間は17時なんだが……」

「知ってるよ。でも、大丈夫。時間遡行出来るから」

「お前の個人的理由で遅刻してTPDDを使用していいのか？」

九曜（大）は待つてましたと言わんばかりに、少し含み笑いを込めて言った。

「みくるちゃんか『1回だけTPDD使用を許可するからやりたいこと全部しておいで』って言うてたから」

「そうか、なら既定事項なんだな」

「しょーゆこと」

僕は前歯が出たよく喋るベテラン芸人を思い出し、苦笑いをしてしまった。

さて、こっちに戻ってからこの丘に来るのは初めてだった。ここは相変わらず都会のような忙しくせかされることもなく、まるで時間が止まっているかのように静かだ。

「私たちが出会ったのもここだったね」

「ああ」

「確かにいきなりこいつが声をかけて来た時はビックリした。無表情だし力も驚異的で大変だったな」

不思議とこいつの前では、自分が饒舌になっているのに気づいた。

「ホント、たくさん迷惑かけたよね」

「いつまで迷惑かけるんだ？」

「禁則事項」

ヒミツのポーズは、やはり様になっていた。

「監視員の自覚ありか」

「でしょ」

ここで沈黙が僕らの会話に割って入って来た。

もう聞いていいのだろうか？まだ早いのか。でも、これを聞けばこいつは帰ってしまうんだよな。

だったら聞かないままでもいいかはこいつはここに居続けることが出来るんじゃないか……。

「優しいね」

九曜（大）はポツリと呟いた。

「私のために聞かないでいるんでしょ？」

「ああ」

僕は喉から搾るように声を発した。

「でも、これは既定事項なの。私はそのためにここに来た。だから話すね」

九曜（大）が自分のエラーについて話し出した。それは九曜（大）が向こうに帰るカウントダウンが始まったのと同じだ――。

「私が航佑と話すエラーを感知し出したのはあなたが帰って来てから。原因はあなたがいない生活を味わったからだと思うの」

九曜（大）は僕に目を合わせず体育座りでビルに付いている赤く光るライトを見ていた。

「あなたが帰って来た時、私はホントに嬉しかった。それで気付いたの。私はあなたナシでは生きて行けないって、それだけ航佑は私に影響を与えたの」

何も言えない。いや、言うべきじゃないのかも知れない。

「でも、航佑の気持ちを私は知ってる……だから私のエラーは蓄積し、私は自らを作り変えるの。それが今の私」

だから僕の知ってる九曜と今横にいる九曜（大）が違うのか……。 「この私はあなたの気持ちを失った私。あなたが苦手意識を持つ性格に組み換え、あなたを友達と認識している。世界の安定には仕方がないことなの」

「仕方ないだと……！」

僕は九曜（大）の肩を掴みこちらを向かせた。

「宇宙人は恋愛したらいけないのか！？お前はそれで満足なのか！ ！違っただろ！橘なら絶対そんなこと言わないはずだ！！」

「でも、これは既定事項なの……きつとある日突然、私は私でなくなる……あなた達がどう足掻いてもこれは既定事項……そうしないとゆきりんみたいに時間改変を行うかもしれない……このエラーは未来を変えてしまう危険があり私の情報改変必ず行わなければ行け

ない絶対最優先コード」

九曜（大）の瞳は涙を溜めていた……。

「僕はお前に何も出来ないのか……いつもお前に助けられてばかりで……」

「そんなことない！みんなと過ごした日々はとても楽しかった！！私にはそれだけで十分だった」

僕は九曜（大）を抱きしめた。それしか出来ないかそれだけでもしたかった。

九曜（大）も黙って抱き締められていた。4つの目から流れる涙を僕は拭うこともなく流し、頬をつたり相手の肩を濡らした――。

ごめん……。

良いよ……でも、一つだけお願いがあるの……。

何だ？

私が今の私になっても変わらず周防九曜として接して……。

分かった……。

ありがとう……。

どれくらい時間が経ったんだろう。とても長く短い時間を過ごした僕らはお互いの拘束を解いた。

「じゃあ、戻ろっか」

そこにはいつもの九曜（大）がいた。今度は目を瞑りグラツとする感覚が来た。

目を開けるとそこは暖かい夕陽が射し込んで来た。

「じゃあ、私も戻るね」

九曜（大）は笑顔を崩さなかった。

「また、帰ったら出かけような」

「いいの？」

「ああ」

「ありがとう。でも、忙しくてそんな暇ないよ」

九曜（大）は笑った。その笑顔は誰よりもまぶしく思えた――
――。

「原因――分かった――……？」

青光りを放った九曜はいつもの九曜に戻っていた。

「ああ、分かったよ」

九曜は頷き、歩き出す。

「今から――出れば――集合時間に――間に合う――」

「そうか、じゃあ行くか」

僕は九曜の横を歩いた。

なあ、九曜。

何――……？

手、繋いで良いか？

なぜ――……？

繋ぎたいからじゃダメか？

良い――……。

僕は手を繋いだ。

藤原の手——温かい——。

そうか？

(コクッ)

なあ、九曜。

何——……？

航佑って呼んで良いぞ。

本当——……？

ああ、呼んでみる。

航佑——あ……。

何だ？

ありがとう——……。

別に。

そうして、僕らは集合場所に着いた。
未来人の僕はこの時間平面上の人と付き合ってはならない。
だが……。
想いを伝えるのは良いよな？

ファミレスに着くと既に無の連中を除いた全員がいた。
「収穫は？」

口に今食べてるパフェのクリームを付けながら涼宮は聞いて来た。
「ないな」

「ダメねえ、あんたやる気あんの？」

「そういうあんたはどうなんだ？」

涼宮は少し苦い顔をした。

「まあまあ、お二人さん。不思議が簡単に見つかったら不思議じゃないよ！何回か探して見つかるもんじゃないのかいっ？」

涼宮の横にいる鶴屋が涼宮をなだめていた。

「しっかりしてよねっ副支部長！！」

「……ちよつと待て、今何て言った？」

「何よ？一回で聞きなさい！今日からあんたは副支部長」

そう言うなり橘と同じ色の腕章が投げられて来た。そこには『副支部長』とマジックで書かれていた。

これ受けなきゃならないのか？

橘を見ると諦めた顔で頷き、古泉もいつものスマイルだ。朝比奈は、目が合った瞬間ビクついていた。

「アハハ、良かったね、フジにゃん」

この女……。

「良いわねっ！フジにゃんがんばんなさいよっ！！」

こうして俺はあだ名と変な役職を勝手に付けられた。
ヤレヤレ……。

ん？どうした九曜？

フジにゃん——……って呼んでいい——……？

頼む……それだけはやめてくれ。

第3話 黒組（後書き）

いかがでしたか？四組四様の展開。

無はキヨン視点、青はハルヒ・鶴屋視点、赤は橘視点、黒は藤原視点。

実は一つ一つテーマを込めて書きました。

無組は決めてません、強いてあげるなら広辞苑？笑

青組は恋ですね。好きだけど、それを伝えることができない。思い切って打ち明けた友達は実は同じ人が好き。でも、友達は彼の気持ちも知っている。だから、身を引いた。そんな切ない恋模様を書いています。

赤組は友情。彼↓古泉くんが変わったのお気づきになりましたでしょうか？

黒組は悲愴です。真実と言うものは時として残酷ですね。

さて、今回は4話、最終話となります。お楽しみ^^

第4話

待ち合わせのファミレスにはすでに皆が集まっていた。

「遅いっ！罰金！！」

罰金なのは分かるが俺だけか？

「当たり前じゃない！女の子に払わせる気！？」

やれやれ。藤原悪いがカードを借りるぞ。ふと、藤原に目線を送ると目が合いお冷やの飲み口に手をやると氷はカランと鳴らせグラスを置いた。それはOKってことか？

とりあえず、俺たちも席に着いた。

「で？戦果は？」

ハルヒはアヒル口でストローを加えながら聞いて来た。俺たちがしたことと言えばただ東側をまるで辞書を引きながら会話しブラブラ歩いてたって感じた。偏差値が3ぐらい上がったんじゃないのか？

「なにそれ！ホントにちゃんと探したの！？」

探すも何も不思議というものはそんな簡単に見つからないもんじやなかったのか？そういうお前は見つけたのか？

「うつ……もう！こんなにいるのに不思議の一つも見つからないなんてあり得ないわ！！」

正しく言うつと近場にこんなにたくさんいるんだが……。俺以外はみんな不思議に該当する肩書きの持ち主達だ。まさに灯台もと暗しとはこのだな。

結局、このままファミレスで一介の高校生の集まりの様に会話が繰り広げられていた。

ハルヒが話し、朝比奈さんが聞く。

鶴屋さんは笑い、橘が突っ込み、佐々木が茶々を入れる。

長門、九曜は無言で、古泉は笑みでみんなを見守り、藤原は退屈そうにみんなを傍観してる。

まとまりがないよう見えて意外にしつかり役割分担されてるんだ

な。

俺か？俺は何だろうな？

「「あなた（あんた）の役割はもちろん……」」

「「受け皿ですね（だ）」」

酷いな……お前ら。そんな感じで男勢でも話しに華が咲いた。

意外に何年かしたらお前達と酒とか飲んでそうだな。

「良いかも知れませんか。昔話を肴にしながら語り合いたいものです」

「僕はその前に帰りたいよ」

お前はいつ帰るんだ？

「さあね。ただ佐々木が落ち着くまではいるだろな。それに……」

藤原はため息を付きながらも少し楽しそうに言った。

「こんな集まりに入れられたんだ。涼宮ハルヒが離してくれるまでは帰れそうにないな」

「それは、御愁傷様、で良いんですかね？」

「まあな」

同情するよ。

「そう思うなら早く落ち着かせてくれないか」

「くつくつく、君たちもなかなか友好を深めているみたいだね」

佐々木がこちらに向きを代え話しかけて来た。

「僕としては実に喜ばしいことだ。彼はこちらで交友が少ないものでねもちろん彼の性格にいささか問題もあるんだがね」

「ふん、余計なお世話だ」

「くつくつく、君も古泉君みたいに少しは笑って見たらどうだい？

……くつくつく、失礼。君が古泉君みたいに笑うところを想像してしまっただけで、君も古泉君みたいに少しは笑って見たらどうだい？

藤原はふんつと言ってそっぽを向いてしまった。それにしても佐々木も自然に笑える様になったんだな。これもハルヒのおかげか？ハルヒは相変わらず宇宙人の話しを三人にしている。

「涼宮さんはとても面白い方だね」

いつの間にか隣に佐々木が座っていた。

「彼女がいるなら僕も北高に行けば良かったよ」

やめとけ、毎日こんな感じに振り回されるぞ。

「くつくつく、それにしても君は楽しそうじゃないか？」

確かに今俺はすごく楽しい。朝比奈さんを誘拐した超能力者や世界の2択を迫って来た宇宙人と未来人たちとこうしているのも変な話だが、普通に楽しい。

「君も変わった。僕も変わったかい？」

ああ、間違いなく変わったよ。

「そうか。確かに今の僕は勉強していても楽しい。キョン、なぜだか分かるかい？」

さっぱり分かん。

「こうやって日曜日にみんなと会えるからさ。少なからず僕にとつてこうしていることはこの上ない楽しみなんだよ」

確かに久しぶりに会ったあの頃より佐々木は落ち着いた。刺々しさがなくなり温かい雰囲気が出ている。

「感謝するよ、君を含めたみんなにね」

やはり、お前はそうやって笑っている方がお似合いだよ。

「あら？もうこんな時間なの？それじゃあ、今日はこの辺で解散しましょ！」

ハルヒのこの言葉によつて本日の団活はこれにてお開きとなり、藤原のカードにより何とか清算を免れた。駅に向かう時にカードを藤原に返そうとしたんだが、

「あんたが持つて置きなよ。どうせ次もあんたの奢りだ」と言つてつきかえされた。

それより何でお前がカードを持てるんだ？

「僕は一応この時間平面上に戸籍があるんだぞ？どうやってかは禁則だ」

朝比奈さんもか？

「禁則だ」

そうかよ。

「コラ！キョン！！支部副遅いわよっ！」

はっ？支部副って……。

「僕のことみたいだ。あんたが来る前に任命されてね」

そう言って右人差し指で『支部副長』と書かれた腕章を回していた。

その何だ、おめでとう。

「ふん」

まあ、少しは未来のことが分かったところで俺たちは駅前に着いた。

「それでは、明日は各学校で今日の反省会をすること！！解散！」

と高らかにハルヒが叫び橘と九曜と藤原以外は駅に向かった――。

帰りの電車では、そんなにはしゃぐこともなく比較的大人しく乗っていた。

そして、光陽園駅に着きいつもの待ち合わせ場所でハルヒの解散の合図を聞いた。

「いい？ここで解散するけど市内探検ツアーは帰るまで何が起こるか分からないんだからね！」

ハルヒは遠足の解散前の教頭先生みたいなことを言い出した。

「どんな些細なことでもあたしに連絡すること！じゃあ、また明日！解散！！」

ハルヒの号令の元、やっと重荷から解放された俺は足早に自転車を取りに駐輪場へ向かうことにした。

第4話（後書き）

次が最後なのですが、各キャラでエンディングが用意されています。

あなたはどれが好きですか？

第5話 ハルヒver

携帯が俺のポケットでうめき出した。自転車のスタンドを降ろしポケットから携帯を取り出すと、ディスプレイには『ハルヒ』と映し出されていた。

電話に出るなり「遅い！」とまるで唾が飛んで来たと錯覚するぐらいの声が耳を貫いた。

「どうしたんだ？」

「解散したとこにいるから10秒以内に来なさい！」

今時小学校でも言わないんじゃないかと思うぐらいのセリフを吐き捨て一方的に電話は切られた。やれやれ、拒否権はナシか。そう思いながらも足早に向かう俺も何だかなあ……。

解散した場所にはハルヒだけが立っていた。

「遅い！10秒って言ったでしょ！？」

10秒で来れるなら今頃陸上界から引つ張りだこだ。他のやつらは？

「あんただけ」

はっ？俺の状況確認が出来ていないにもかかわらず、ハルヒは自転車の荷台に座った。

「遅刻した罰よ。あたしを家まで送りなさい！」

まさかそのために俺を呼んだのか？

「あんた、暗い夜道を女の子1人で歩かせる気？」

お前なら変質者を逆にのしてしまいそうだが？ハルヒの返事は俺の脛を蹴るという行為だった。

「ずべこべいわずチャッチャとこぎなさい！」

ペダルがいつもより重く感じるのは俺の不平不満で間違いないだろう――。

日本特有の梅雨が迫っているのか夜になっても日中の暑さが残っており自転車を漕ぐ俺も汗を身に纏いだした。そんな俺を尻目にまるでラスト400mの騎手のように後ろからハルヒの急かす声が聞こえる

なあ、ハルヒ。もう少し女の子らしく乗ったらどうだ？

「女の子らしくってどんな乗り方なの？参考まで聞いてあげるわ」
そうだなあ。横座りして腰に手を回して微笑んでいたらいいんじゃないか？

「あんたそういうのが好みなの？佐々木さんはそういう風に乗ってたんだ」

何で佐々木が……しかし、今の例えは本人だが、と言うかあいつしか乗せたことないからな。

俺の考えが読まれたのかそれつきりハルヒは何も言わなくなった。これはこれで寂しいものだな。

俺が何か話題を考えてる時に腰に違和感を感じた。お臍辺りに視線を映すと手が回されていた。

ハ、ハルヒ……？

「あんたがやって欲しいんでしょ？だからやってあげる」

よく見ると横座りで俺の腰に手を回し体に背中密着させており、背中からハルヒの温かさを感じとれた。自転車も漕ぎ外温がこれだと言っのにハルヒの体温は心地良い温かさだった。

大丈夫か？汗臭くないか？

「平気」

長門お得意の一文返事をあのハルヒの口から発せられた。不覚にも俺はそんなハルヒがかわいく思えてしまい少し困らせてみたいといういたずら心も芽生えてしまった――。

「えっ……キヨ、キヨン……？」

予想としては「何すんのよ！このエロキヨン！！」だったんだが

な。

俺は腰に回してるハルヒの手を握ってやった。

「嫌か？」

「イ、イヤ……じゃないけど」

しまった。こんなしおらしいハルヒ反則過ぎる……。どんな表情をしてるか顔を見てみたいが安全を優先しなければいけないから我慢しよう。

「キヨンはさ……」

俺が知らない間に後ろが入れ替わったのかと思うくらいしおらしい声が聞こえてきた。ホントにハルヒなのか？

「キヨンは……その……好きな人とか……いるの……？」

ハルヒの突然の質問に俺は困惑してしまった。恋は一種の精神病と言ったやつが好きな人をいるかって？おいおい、これは夢か？夢ならフロイト先生に診察をしていただきたいね。

そんな俺の心中を察したかのかと思うくらいハルヒがタイミング良く俺の手を強く握ってくれた。間違いなく夢じゃないな。俺も強く握り返した――。

また無言が俺たちを支配し耳には自転車のタイヤが回る音とライトを点灯させる音、そして虫の鳴き声が聞こえた。

始まりがあれば終わりもある。

ハルヒの家が見えて来た。

ハルヒは荷台が飛び降りるといつものハルヒがそこにいた。

「送ってくれてありがとう。気をつけて帰りなさいよ」

「分かってるよ」

「じゃあ、また明日。お休み」

ハルヒの後ろ姿は答えを待っている気がした。今言わないとダメな気もした。

「ハルヒ」

玄関ドアノブに手を回したハルヒは振り返った。

「何？」

「さっきの答え言ってなかったな」

「う、うん」

目の前には俺が見てみたかった荷台にいたハルヒだ。

「俺には好きな人がいる」

ハルヒは澄んだ瞳で俺を見つめていた。俺もその瞳を見ていた。

吸い込まれそうなその瞳に言葉を引っ張り出されて行く様な感覚を覚えた。

「そいつは、人のことなんか全く気にしないし意見も聞かない。脊髄反射的に動くし周りのことなんか何とも思っていない」

これだけ言えばただの悪口だよな。

しかし、これには続きがある。

「しかし、そいつは何をやるにも全力で子どもみたいな無邪気な笑顔を作る。意外に仲間思いだし、何よりポニーテールが似合う」

「そ、それって……」

「ああ、お前だよ。ハルヒ」

ハルヒの澄んだ瞳から涙が溢れていた。

「えっ……」

気が付けば俺はハルヒを抱き締めていた。あんなバカ力がどこから産み出されているのかというくらいハルヒの体は女の子らしかった。別に女の子の体に詳しいわけじゃないからな。

「好きだハルヒ」

ハルヒの手に力が入ったのを俺の服が引っ張られたことで分かった。

「あ……あたしも……キョーン……」

ただたどしくそう言って、顔上げたハルヒは泣いているせいか瞳が潤んで反則なぐらいかわいかった。

しばらく時間が止まった気がした。そう、ハルヒが背伸びをして

キスをしてきたからだ。

「えへっ、キヨン大好きよ!」

そこにはいつもの団長様がいた。

「ずっとあたしのそばにいなさい!」

それは団長命令か?

からかうつもりだったがハルヒは顔を赤らめながらこう言った。

「こ……告白よ!返事は!」

「もちろんだ。俺はずっとハルヒのそばにいるよ」

そして、また俺たちは唇を重ねた。

く終わりよ!く

第5話 ハルヒver（後書き）

一応、ハル×キョンがこの話の正規のルートとさせていたただいて
おります。後は、まあ選択によっては何かギャルゲーっぽい笑

第5話 長門ver

携帯が俺のポケットでうめき出した。自転車のスタンドを降ろしポケットから携帯を取り出すと、ディスプレイには『長門』と映し出されていた。

「もしもし」

「……」

長門を知らないと言電話だと勘違いしそうだ。呼吸する音すら聞こえない。

「長門？どうした？」

「……家に来て」

長門はそう言うなり電話を切った。相変わらず原稿用紙一行分だが、いつもと違う雰囲気が出た。たった一行分の会話で相手のことが分かるのも俺があいつを注意深く見ていたからだ。

俺は自転車の行き先を長門のマンションに向けた。

俺はいつも通り長門の部屋番を押した。

「入って」

呼び出し音が鳴ることもなく長門の声がしドアが開いた。こいつもしかしてずっとインターフォンの前で待っていたのか？

俺はエレベーターに乗り長門の部屋に向かった。

ドアの前に来た瞬間ドアが開いた。ホント、待つということがなかった。

そこには北高の制服を着た長門が立っていた。こいつにとって制服は部屋着なのか？

何も言わないまま長門はリビングに向かう。入れという合図なんだろうと思いつながらせてもらうことにする。

相変わらずリビングは前に着た時から変わらないまるで引越したばかりみたいに殺風景だ。模様替えもくそもないな。

長門は台所にいるらしく時より食器同士が当たった時に奏でる高

い音が聴こえて来た。

しばらくすると長門は急須と湯飲みを2つお盆に載せて運んで来た。

席に着くとお茶を淹れてくれて「飲んで」と促され、俺はありがたくいただくことにした。

うーん、朝比奈さんの凝ったお茶を飲んでいるせいか少し物足りない感じがするな。ふと、視線を感じたのでこの部屋に俺と対面に座っているもう一人に目を移した。

「美味しい？」

ああ、美味しいよ。別に不味くはなかったからな。

「良かった……」

やはり、今日の長門は変だ。少し笑った気がしたし、むしろ照れ笑いじゃないか……。俺は長門の異変に気付き始めた。

俺が飲み干すと長門はすぐにお茶を淹れてくれた。3杯程飲んだが、急須の中にはお茶がまだ入ってそうだった。これも情報操作なのか？ わんこそばをやめる時のように手を湯飲みにのせ蓋代わりにした。

「もう、良いぞ」

「そう……」

ここで長門は初めて自分の湯飲みに手を付けた。俺は長門が冷めたお茶を飲み干すのを待った。

「で？ 今日は何の話だ？ またハルヒに何かあったのか？」

長門は首を横に振った。

「今日は涼宮ハルヒの話しであなたを呼んだわけではない」

じゃあ、古泉か？ 朝比奈さん？ 鶴屋さん？ それとも九曜や藤原、橘がまた佐々木を神にしようとして動いているのか？

俺の答えはいずれも的を射ることは出来なかった。ここまで答えを外したらユニット組まされてCD出せそうだな。

「今日は私のこと……」

普段よりも小さい声で発せられた言葉を俺は何とか聞き取ることが出来た。

長門は空になった湯飲みにお茶を淹れると飲み干した。
熱くないのか？

「平気」

そうかい。俺は見てるだけで舌が火傷しそうだ。

「そう」

長門は湯飲みをテーブルに置くと視線をこっちに向けて来た。

「あなたは誰かを好きになったことがある？」

まさか、長門から発せられることのない言葉を耳にした俺の頭の中は、G Kがいないから代わりにやるハメになったDFの選手みたいに戸惑っている。

誰かを好き……にか？あるにはあるが大分前のことだぞ？

「そう……ぜひ、聞かせて欲しい」

俺の恋バナをか？

長門は深く頷ぎ続けた。

さて、どうしたものか……。こいつが人の恋愛に興味をもつ？一体、長門はどうしちゃったんだ？これも情報統合思念体が関係しているのか？

「情報統合思念体は関係ない。私の意思によるもの」

まあ、長門がそういう女の子っぽいことに興味を持つのはいいことだ。俺のしょぼい恋バナで良ければ話してやるよ。

「ありがとう」

俺は親戚のお姉さんを好きになりその人が駆け落ちして失恋してしまう話を少し詳しく話してやった。その間、長門はただ黙って俺を見つめていた。

相手に気持ち良く話をさせてあげるには適度な相づちや復唱をしてあげることが大切と言うがまさにその通りだな。長門の前ではあのアメリカ初の大統領も変革を口にしなくなるかも知れない。

それぐらい話しづらい。元から気分が乗らない話をただ一方的に話した感じで話し終わると長門がふいに呟いた。

「今、あなたは誰かのことが好き？」

おいおい、本当にどうしちまったんだ長門？どっか具合でも悪いのか？

「機能は正常。人が相手に好意を抱く感情に対するデータが不確定。そこで体験によるデータを入手する必要がある」

それで俺の恋ばなを聞きたかったのか。

「そう……あなたの情報とこれまで入手した情報を解析し、一つの結論が出た」

長門の結論というのは少し興味があるな。きっと、どんな教授も有無を言うことが出来ないんだろう。

「私はあなたのことが好き」

世界が止まったかと思った。そしてまさか俺が有無を言うとは、将来は教授か？いやいや、現実逃避はよそう。

「俺のことが……好き？」

「そう、有機生命体が異性を好きになるという理由、行動パターンを分析した結果、わたしがあなたと接触、関係すると起きるものが多く該当する。よって有機生命体概要で好きという結論に至った」

これは長門流の告白なのか？

じゃあ、今日俺をここに呼んだのは？

「あなたと二人で話がしたかった」

俺に好きな人がいるか聞いたり恋ばなをさせたのは？

「あなたのことが知れたかった。後、佐々木佳穂との会話は彼女に負けたくない。有機生命体の概念では、意地や嫉妬によるもの、つまり『やきもち』という言葉が相応しい」

こんな長門を誰が予測した？目の前にいる長門は人間に近いどころか完璧恋する乙女じゃないか。

そして、俺はその気持ちに答えてやる必要がある。

俺にとつての長門はいつでも頼れる万能宇宙人、同じ団員、いや、そんな肩書きで片付けては収まらない。

俺が長門をいつも見ていたのは無理をしないか心配していたのと……。

そう、俺にとつての長門は……。

ええーい！俺も男だ！！

長門！

何……？

俺もお前のことが好きだ！

……そう……／／／／

頬を赤らめ視線をテーブルに移す長門は今まで見てきたどの長門よりも人間らしくまた可愛かった。

俺は長門の方に移動し後ろから長門を抱き締めた。髪からシャンプーの香りは何とも落ち着くものだった。全てを包み込めそんな華奢な体。こんな体で俺たちを守ってくれてたんだな。

ありがとうな長門。

長門は俺の手をとり俺に体を預けていた。ふいに俺たちは目が合

った。俺を見上げる長門。その見つめる瞳に吸い込まれる様に俺たちはキスをした。

長門、今日から俺がお前を守るからな。

く終了く

第5話 長門ver（後書き）

はい、長×キヨンです。

エラーを素直に恋心と認識できた長門さん。

やっぱり、積極的な長門さんがいいですね^^

ひょっとして、消失長門を長門は組み込んだのでしょうか？

次は、キヨんくんのマイエンジェル♪

第5話 みくるver

俺が駐輪場から自転車を出し、出口向かって歩いていると、目の前に人影が見えた。

「朝比奈さん……」

その人影とは、今日も可愛い服装を身に纏ったSOS団のマスケットキャラクターならびに俺の癒し朝比奈さんだった。

「キョンくん！お話があります！！」

俺は朝比奈さんが未来人であることを俺に明かしたあの日を思い出していた――。

しかも、朝比奈さんに連れられ歩いている場所はまさにその公園だ。

「懐かしいですね」

「そうですね」

おそらく、朝比奈さんも思い出しているんだろな。

久しぶりに二人っきりの時間、思えば朝比奈さんはいつも俺に幸せを運んで来てくれた。俺にとって朝比奈さんではなくてはならない存在。空気よりも必要なくらいだ。

SOS団の中でも……いや、誰よりもそばにいて欲しい存在だ。

「どうせなら、あの時のベンチに座りましょうか？」

俺の誘いに朝比奈さんは

「実は……私も同じこと考えてたんです」

とはにかみながら答えてくれた。

俺たちはあの時のベンチにあの時と同じように座った。

あの日とは違って公園を夜が覆いその中で光り輝く電灯が俺たちを照らしていた。その光はまるで俺たちが舞台の役かかと錯覚してしまうほど輝いて見えた。

「今日の不思議探検ツアーどうでした？」

朝比奈さんが話を切り出し、お互いに今日あったことや近況を話したりと他愛もない会話をやりとりした。俺にはこれだけで充分だったんだがそれよりも気になることがあった。

（キョンくん！お話があります！！）

まるで初めての家に訪れる子どものような緊張した顔で俺をここまで呼び出した理由は何なんだろう？

「それでね鶴屋さんったら……キョンくん聞いてます？」

「あつ聞いてます。鶴さんがどうかしたんですか？」

俺は聞いてた部分だけを復唱した。

「ホントに聞いてたのお？怪しいですう……」

その人を怪しんで見る目可愛すぎますよ。

「そ、そんな〜かわいいだなんて……って、はぐらかそうそうしてない？」

あつバレました？

「ダメですよ〜お姉さんにはバレバレなんですから」

その『お姉さん』と強調したところ気にしてる証拠ですね。

「あつバレました？」

バレバレですよ。

「フフフ」

朝比奈さんは可愛らしい小鳥の様に笑い、俺もつられて笑ってしまった。朝比奈さんの笑顔はまるでこの暗闇すらも明るく心地よく思えるくらい優しく温かいものだった。

「ホント、キョンくんにはかなわないですう」

「そりゃあ、そうですよ。だっていつも見てますから」

「えっ……？」

しまった……ついつつかり本音が出てしまった……。

「キョンくん……それってどういう意味……？」

ここまで来て言い逃れが出来るくらい俺は嘘を付くのは上手くない。ましてや朝比奈さんにウソなんて……。

その瞬間、俺の中で何かが繋がり、俺は決意をした。

朝比奈さん！

は、はい！

さっきの言葉の意味なんですが……。

う、うん……

そ、その……（くそっ！いざとなったら勇気がでない！！情けねえ……）

スッ

「えっ？」

朝比奈さんは俺の右手に両手をのせ優しく包んでくれた

「良いですよ。ゆっくりで。キョんくんのペースで言って下さい……」

「朝比奈さん……」

優しく微笑んでくれている朝比奈さんだが目には少し涙の膜が作られていた。これ以上この綺麗な瞳を涙の膜で覆われて見れなくなるのはイヤだ！

「俺！朝比奈さんのことが大好きです！！」

俺は今までの中でもしかしたら今後これを越えるものはないだろうと思うくらいの高い壁を乗り越えた。

しかし、朝比奈さんは顔を下に向けたまま黙り込んでいた。

「グスッ……」

「あ、朝比奈さん……」

朝比奈さんの涙が服に落ち染み込んでいった。

「グスッ……」

「やっぱり、俺なんかダメですよね……」

「……うの」

ウノ？

「違うんです！」

顔を上げた朝比奈さんは涙で顔がグシャグシャになっていた。

「うえーん、キョんくうん」

朝比奈さんはいきなり俺の胸に飛び込んで来た。

「私もキョんくんのことが……大好きですう。ホントはそれが言いたくて呼び出したのに……」

まるで子どもがただをこねるみたいに朝比奈さんは俺の胸で言ってくれた。公園には朝比奈さんの泣き声が響き俺は朝比奈さんの頭を撫でてあげた――。

泣き声も収まりしばらく静寂が俺たちを包んだ。そろそろ、落ちて着いたかな？

朝比奈さん？

返事がない。

恐る恐る顔を覗きこむと……。

「くーくー」

気持ち良さそうに眠っていた。泣きつかれたんだろう。頬には涙が流れた跡が残っていた。

俺の女神は遊び疲れた天使のように無抵抗な寝顔を作っていた。

何しても起きないかな？

試しに頬つぺたをツンツンしてみた。見た目通り柔らかい頬つぺたに俺はつい何度もツンツンしてしまった。

「うん……」

一瞬ヒヤリとしたがまた何事もなかったのように寝息をたてはじめた。

起きないなら……と色々考えてみたら寝込みを襲うなど男としてどうかと思うが……キスぐらいならいいよな？

俺がさつき登った壁よりもさらに高い壁を乗り越えるべく朝比奈さんの顔を覗き込んだ。ホント、幸せそうな寝顔だ。視線はやがて朝比奈さんの唇に集中した。俺は起きないようにそーっと動きついに顔が間近まで近づいた。

後少し……。

「朝比奈さん。もう遅いですからそろそろ起きて下さい」

「ふみうふえっ……キョンくん？えっ？わ、わたし……ヤダ……寝ちゃった……」

朝比奈さんはあわわてベンチの端に移動するとまるで怒られるが分かって反省している仔犬みたいな目を向けていた。

「大丈夫ですよ。寝てる間に色々させてもらいましたから」

「ええっ！キヨ、キヨ、キョンくん！一体何したんですかあ！？野蛮です！！酷いです！！変態！悪魔！ドロボー！」

冗談ですから。殴らないで下さいよ。

「ホントに？」

はい。

「怪しいですう……」

その怪しむ目は可愛すぎますよ。

「むう……同じ手には乗りませんよ」

そう言いながら嬉しそうですよ。むくれた顔も可愛いです。

「もおーキョんくんのバカアー!!」

そう言つと朝比奈さんはまたポカポカと殴り始めた。しかし、最後は結局笑顔に戻り「帰りますか」との俺の誘いに「はいっ」と笑顔で応えてくれた。

朝比奈さんがベンチから立ち上がる時俺は手を貸してあげた。

「ありがとう」そう言つて朝比奈さんは俺の手をとり立ち上がった。
「キョ、キョんくん……?」

俺はそのまま手を離すことなく歩き始めた。朝比奈さんも何も言わなかったし良いんだろ?

公園の外に停めていた自転車の後ろに朝比奈さんを乗せ朝比奈さんの家に向けて自転車をこいだ。

来る時に感じた風景と違うのは後ろにいる大切な人いるからだな。

しかし、そんな幸せな時間は短い。

「ここでいいです。もうそこだから」

朝比奈さんはそう言う荷台から降りた。

離れたくない……。

「……って思つてない?」

はい、思つてました。

「フッフ、やっぱり。よく分からないんだけど不思議とキョんくんが考えてること分かるの」

そうなんですか?じゃあ、今俺が考えていること分かりますか?

「もちろんっ」

朝比奈さんは少し意地悪な顔をすると近づいて……。

まさに、朝比奈さんの言う通り俺はキスをしたと思つていた。

「エヘヘ、私からって変だね。でも、さっき我慢したご褒美」

そう言つと朝比奈さんは走って行った。えっ?いつから起きてた

んですか？朝比奈さんは立ち止まって振り返るとあの日と変わらな
い仕草でこう言った。

「禁則事項ですっ」

言うと思いましたよ。俺は朝比奈さんの姿が見えなくなると自転
車を家路に走らせた。まあ、みんなの女神が今日から俺の女神にな
ったから良しとするか。

おっと、このことはあいつらには禁則事項だからな？

今、朝比奈さん（キョンくん）はきつところ思ってるんだろな。

「キョンくん（朝比奈さん）、大好き」

く終わりですうく

第5話 みくるver（後書き）

ミク×キヨンですう。いかがでしたでしょうか？ちょっと、みくるらしくないしすっかりした感じがありますね。でも、この二人ってこんなイメージがするんですよね。未来に帰るといふ縛りはどうされるのでしょうか？それすらも乗り越える二人に期待したいと思います

何か自分で書いているのに他人ごとですねw
次は~~~~あの人！

第5話 鶴屋ver

俺は駐輪場から自転車を取り出すと家路へ向かった。ふと、さっきいた駅前に目をやると先ほどまでのうるさはどこへやら（ハルヒが原因だが）照明がむなく自己主張をしているだけだった。

そんな照明のないところに俺は一輪の花を見つけた。その花は昼間あんなにキレイ咲いていたのに今はまるで太陽を待ち遠しかのよう空を見上げていた。俺はその花に近づいていった。

「帰られないんです、かあつ……！」

後ろから声をかけたため裏拳が飛んで来た。綺麗な花にはトケがあると言っしな……。

「によろっ！？な、何だいキョンくんかいっ！！ご、ごめんよく怪しい人だと思つてさっ」

「良いですよ、いきなり声をかけた俺も悪いですから（実際鼻が凹んだと思つたがな）」

しかし、さっきのテンションは裏拳と一緒に飛ばしてしまったのか今はいつもの明るい鶴屋さんに戻っていた。

俺のはながへこんだからか？
すまん、忘れてくれ……。

「それにしても、どうしてココに？」

俺は鶴屋さんに聞きたかったことを尋ねた。

「車を待つてるのさっ！」

「一人で、ですか？」

「そうさっ！みくるたちは古泉くんが呼んだ車で送つていったからね！！いやゝまさか古泉くんがお金持ちとは知らなかったさっ！」

古泉のはおそらく機関の車だろうが。

「一緒に乗つていけなかったんですか？」

「あたしはいいのさっ！」

「そうですか。じゃあ、車が来るまで一緒に待ってますよ」

「そ、そんなの、悪いって！」

俺の提案に鶴屋さんは両手を俺に向けて芝刈り機！みたいに手を左右に振っていた。

「良いですよ。一人でこんなところにいたら変な人に声をかけられますよ」

「その時はさつきみたいによつつけるさ！」

そう言ってボクシングのシャドーを披露してくれた。ハルヒのパンチがミサイルなら鶴屋さんのパンチはさつき受けた裏拳の威力からするとマシンガンのような威力なんだろうな。

でも、こんなところに一人じゃほっとけませんよ——。しばらくそんなやりとりが続き、結局俺が勝手に待つというかたちで話は落ち着いた。

「あ、ありがとう……」

そのありがとうはいつもと違った頼れる姉貴鶴屋さんじゃなく、まさに大和撫子と言っても過言じゃないぐらいの鶴屋さんのありがとうだった。いつもがひまわりなら今は牡丹って感じだな。

俺は自転車を止め迎えの車が来るまで二人で今日の不思議探検ツアーについて話し合った。

「結局、あたしがハルにゃんを買い物に付き合わせてしまった感じになってさ！」

そうなんですか。俺なんて辞書を読みながら散歩していた感じでしたよ。

「アハハ、有希っこと佐々やんらしいによる！」

おかげで賢くなった気分ですよ。

「そうなんだっ！あたしも今度二人と出かけてみようかなっ」

オススメしませんよ。

「そうかいっ？アハハ……！」

ほんと、この人といると笑いが絶えない。見ているこっちも楽し

くなる。

なのに、どうしてこんなに幸せそうなのに一人の時はあんなに寂しそうだっただろうか……。

「鶴屋さん」

「何だいっ？」

「俺たちという時はこんなに楽しそうなのにどうしてさっきはあんな思い詰めた感じになっていたんですか？」

「えっ……？」

あの鶴屋さんを俺は黙らせてしまった。それほどダメなことを言うてしまったようだ。

何か気の利いたことを言えよ俺！

「あ、あの鶴屋さん……？」

鶴屋さんは俯いたまままるで操り手がなくなった操り人形のように生氣すら伺えない。

「そ、そのいつもの鶴屋さんも素敵でしたが黙った鶴屋さんもかわいいで……」

「あたしはね……」

一瞬また裏拳が飛んでくるかとヒヤリとした。

「あたしはね、正直寂しいのさ……」

ぽつりとそう言った鶴屋さんはさっきまでとは別人のように弱気に見えた。

「鶴屋家って言えばここで知らない人はいないってくらいお金持ちでさ、あたしは次期当主だって昔から言われていたのさ。あたしもおじいちゃんが好きだから別に良かったんだけどさ、次期当主……うっん、鶴屋家に生まれたものには絶対してはならない制約があるのさ」

「制約ですか？」

鶴屋さんは僅かに頷いた。

「それは『観察者であっても当事者にはならない』ってこと……つまり、中心にいてはいけないのさ」

だから、俺たちと関わっていながらいつも中心にいないんですね。
「あたしは呼ばれないと行事の参加することが許されないのさ……正直、こうやってハルにゃんやみくるが呼んでくれるのが嬉しい。だから、あたしもあたしが出来る限りで協力したい」

「なるほど、それでいつも手伝ってくれたり場所を提供してくれるんですね」

「キョンくんたちといると本当に楽しいからねっ！」

今の鶴屋さんの笑顔はお日様満点に浴びた向日葵じゃなかった。どこか寂しく、無理して作った笑顔だった。

「そんなに無理しなくていいんですよ」

「えっ？」

「寂しいなら寂しい顔をして下さい。ありのままの鶴屋さんを俺たちは受け入れますよ。俺たちは鶴屋さんから離れませんよ。だって仲間じゃないですか」

「キョンくん……」

鶴屋さんの目から涙が溢れていた。もしかしたら、いつも明るい鶴屋さんが初めて他人に見せた心の奥底にいた鶴屋さん。

「今の鶴屋さんはいつもの鶴屋さんよりもステキです」

その一言で鶴屋さんは自分を解放した。人目も気にせず当事者となり泣いている。そんな鶴屋さんに俺は肩を貸し頭を撫でてあげた。

もう我慢しなくていいんですよ。もし、あいつらの前で無理ならせめて俺の前だけでもウソを付かないで下さい。

キョンくんはずるいよ……何でこんなに優しいのさ……。

ずっとこうしたかった……キョンくんなら受け入れてくれるって信じていた……けど……キョンくんには嫌われたくなかった……。

信じれなくてごめんによる……。

いいんですよ。今は信じてくれてるんですから。

キョンくん……。

好きです。鶴屋さん。

……

当事者になつていけないなら俺をずっと観察していることにしたらいいじゃないですか。観察するには一番近くにいる方が良くないじゃないですか？

そんな……ハルにゃんや有希っ子、みくるや佐々やんに悪いにしろ……。

そんなことないですよ。

「そんなことあるさ！」

鶴屋さんは顔を上げた。いつもとは違い涙目で弱きな鶴屋さんがそこにいた。

「あたしは当事者になつたら行けない。それにみんなとの関係を壊したくない。だからキョンくんを独り占めなんてしたらいけないよ。あたしは今こう出来ただけで十分だからさ……」

鶴屋さんはいつもの様に笑おうとしているが、目だけは本当のことを訴えていた。

「俺は鶴屋さんという時が一番幸せなんです。鶴屋さんは自分を押し殺してまで周りを楽しませようとする優しい方です。俺はそこに惹かれました。だから……自分の気持ちに正直になりましょう、俺も正直に言います」

深く息を吸い込んだ俺は、ありったけの声で叫んだ。

「鶴屋さん、好きです！俺と付き合って下さい！！」

俺が告白をした後、鶴屋さんは再び泣いた。その涙は自分で作った壁を破壊する鉄砲水のようにだった

たくさん我慢して来たんだろう。

しばらく収まることなくずっと声を出しながら泣いていた。

そして……。

「あたしもキヨンくんのが好き！大好きによる！！」

と人目はばかりず叫んでくれた。俺たちの愛の叫び合いに少ない人の視線が恥ずかしかったが、それよりも嬉しかった。

その言葉は彼女の本心だからな。

後で知った話しなんだが、鶴屋さんは車を呼んでなかったみたいだ。通りで来ないと思ったよ。ってことは……まさかな……。

まあ、真相は後ろに乗っている人に聞いてくれ。

「キヨンくん！坂道の様な辛いことも二人で登れば簡単に乗り切れるさっ！！」

だったら、降りていただきいたんだが……。まあ、あなたの声援があるから登りきれたんですね。

家までの道中、鶴屋さんはひまわりどころか太陽の様に誰よりも眩しい笑顔をはなっていた。

やっぱり飾らない鶴屋さんが好きだ。

いつまでもそばで俺を照らしていて下さいね。

（終わりによる！！）

第5話 鶴屋ver（後書き）

にほんブログ村の笑顔の大先輩、SOS団名誉顧問鶴屋さんでした。微妙な距離を置く鶴屋さんの真相に少しせまってみようと思いましたが……キヨンはやっぱり勝気な女の子がお似合いかもね。ハルヒもそうだけど、やっぱり鶴屋さんみたいな内助の功的な人がいいかもね。

まあ、そんな感じで鶴×キヨンでした。次はもう一人の神様です。」

第5話 佐々木ver

俺たちは駐輪場へ向かっていた。なぜ『たち』かって？

それは……。

「君もこの駐輪場なんだね。確かにここは少し駅から離れているが、駐輪代が100円とお得だからね」

佐々木が横にいるからだ。佐々木は俺が同じ駐輪場に停めている理由を当ててみせた。

「簡単なことさ。月契約だが僕も同じ安いという理由で停めているし、それで一時預かりがいっぱいになっている日が多いからね」

佐々木は自分の推理に満足したのか喉を鳴らして笑う独特の笑い方をした。

俺は自転車の密林から自分の自転車を難なく見つけると出口に向かった。出口にはすでに佐々木がいたが、何故か自転車がない。

「自転車はどうしたんだ？」

「ああ、それがね。恥ずかしい話しになるんだが、今日は自転車で来ていなかったことを忘れていてね。自転車がいつものところになかったことだと思いだしたんだよ。なあに、今日は休みだから気分転換にバスで来たんだよ。くつくつく、慣れというものは恐ろしいものだ」

いたずらっぽく佐々木は笑った。俺だって英語の教科書を見ただけで眠くなっちゃうよ。

「ほう、オペラントの動機づけは睡眠欲にもつなげることが出来るのか。君は相変わらず面白いことをしてくれる」

そうか？まあ、おかげで英語はからつきしだけだな。

「キヨンにとつては立派な言い訳が出来て良いんじゃないかい？」
言えてるな。

二人して笑った。その光景は何故か昔に戻った気持ちになった。昔と言っても2年前なんだがずいぶん前に感じた。

思えば、春からまた会う様になったが、神だの鍵だのでお互いギクシャクしていたが、今はそんな蟠りもなくこいつと話を久しぶりにしている気がする。

「と言うわけで、悪いんだが久しぶりに君の自転車の後ろに乗せてくれないかい？出来れば、家の前まで頼むよ」

「ああ、構わんぞ」

俺は昔と同じような感覚で佐々木を後ろに乗せて走り出した――

佐々木は昔と変わらない乗り方でただ黙って後ろに乗っている。

佐々木はいつも後ろに乗ると喋らず流れる景色を見ていた。一度、喋らない理由を聞いてみたことがあるんだが「君はただでさえ自転車をこぐという酸素運動をしているのに、話しかけて余計な酸素を使わせて安全運転じゃなくなると困る」と言われた。別に気は使っていないと言いたいところだがその10倍の言葉を返されそうだからやめにしたな。

佐々木の扱いは慣れている。だてに1年間一緒にいなかったからな。

「今日のお礼として勉強を見てやろうかい？」

それは有難い。佐々木の家家庭教師の腕の良さは知っているからな。

「おや、君の中で僕はそんな評価があつたとは」

おふくろもだぞ。

「とんでもない、僕は逆に申し訳ない気持ちでいっぱいなのに」

そんなことないさ、佐々木のおかげで高校に入れたようなものさ。

「そうかい、じゃあ大学受験で名誉挽回させてもらうでしょう」

それから自転車をこぎながら佐々木の家家庭教師が始まった。俺が問題に答え、佐々木が解説を挟む。実に単純なことだが、意外にも昔やったところが抜けており正直驚いた。

「君はあの時から弱点が変わっていないな。あんなにやっておくように忠告していたのに」

すまない、受験が終わった解放感に負けてしまつてな。

「くつくつく、キヨンらしいな。でも、今回はそうも行かない。今から対策しないと一緒の大学に行けないよ」

おいおい、いくらなんでも俺の頭の容量じゃ佐々木が家庭教師でも無理だろ。例えるなら98にVisstaを突っ込むぐらい無謀なことだぞ。

「そんな気持ちでは困るんだよキヨン！」

佐々木が珍しく声を荒げ腰に回している手にも力が入っていた。

「君は僕が今の学校でどんな日々を過ごしているか知らないからそんなことが言えるんだ。毎日毎日勉強、で勉強のために予備校で勉強する。いくら学ぶことが好きな僕でも頭がおかしくなりそうだし、まずいな……」

俺は近くに小さい公園を見つけると自転車を止め佐々木を誘った。ベンチに座ってから佐々木のマシンガンのスピードでミサイルぐらいの威力の言葉は止まらない。

「僕はあんなに苦労しているのに、君と来たら何だ！毎日涼宮さんや長門さん、朝比奈さんや古泉くんたちと楽しく過ごし、休日はデートとは良い身分じゃないか！それで勉強出来ないなんて自業自得もいいことだ！大体……」

長くなるので省くな。初めての人はこいつのマシンガンミサイルに卒倒すること間違いなしだからな。

しかし、次に発したミサイルの威力は世界中のどんな兵器も強力だった。

「僕はただ君といればそれで良いんだ！」

それってつまり……。

佐々木は一瞬驚いた顔をしたがすぐに表情が固くなった。

「ああ君が思っている通り僕はキヨンのことが好きってことだよ！

！

佐々木の怒りは更に火がついたのかこれまでのアプローチを話し出した。俺からしたらそうだったのか？と思うことしか出来なかった。

「君という男はここまでしてなぜ気づかないんだ！」

そう言われても、俺はただ謝ることしか出来ない。

「過ぎたことを言っても仕方ないか。ある意味君のそういうところの無欲さに僕は惹かれたんだから……」

佐々木はこう呟くと俯いた。ちょうど、佐々木の靴が蟻の行く手を阻んでいたが彼女は蟻に道を譲ってあげていた。

「僕の父はね、男の子が欲しかったんだ」

佐々木はこう切り出すと初めて自分の過去を語り始めた。

昔、一度聞いたことがあったがその時は「過去は過去。今を見るんだ」とはぐらかされたが、まさかこいつが過去を語ってくれるなんて思わなかった。

「だから僕が女の子と分かった時はショックだったみたいだよ。二人もある程度年齢がいつていたから僕が最初で最後の子ともだと思っただって」

中学の時にこいつを塾から送っていたが両親の顔は見たことがなかった。

「父は僕と遊ぶ時は男の子が好きそうな遊びをやるからね、自然と僕も男の子の様なものを好むようになった。でも……僕に弟が出来たんだ……それから二人は僕より弟を可愛がってね。僕は何としても好かれようとみんなが苦手な勉強も頑張った。しかし、両親は認めてくれなかった。僕が両親にもらったのは呼称だけさ」

佐々木は悲しそうだった……こいつがこんなに悩んでいたのに近くにいた俺はどうして気付かなかったんだろ。佐々木だからか？何でもこなせる佐々木。いつも笑っていた佐々木。しかし、どこか違うことは分かっていたのに……。

「僕はそれから女の子になろうと努力したよ。でも、男の子にはこ

のままで良かったんだ。僕を気味がって誰もよって来なかったからね。たまに来る男 子も少し難しい話をしてあげたらもう近づいてすら来ない。でも……君だけは違った。君は今まで出会ったどの男の子、いや人よりもキヨンは僕を僕として見てくれた。僕が考えた『人を引き離す話』も普通に聞いていたしね」

そんな話があったのか？

「ああ、君の前では范増もタジタジだろうね」

佐々木はここで笑った。それは本当に心から笑っているように思えた。

「僕は君を落として見たくなった。しかし、君はことごとくそれかわした。気が付けば僕の頭の中は君でいっぱいだった。そして……君という存在を僕は独り占めにしたくなった」

だから受験勉強も手伝ってくれたのか。

「そうだよ。でも、その願いは届かなかった。その時君に縁がないんだと思ったよ。でも、違った。僕は再び君とこうして話をしていく」

佐々木は顔を上げるとこっちに体を向けた。その時の佐々木は今まで見て来た佐々木よりも女の子っぽかった。

「私をキヨンのパートナーとして認めて欲しい……」

俺は何も言えなかった。ここまでこいつを追い詰めておきながらそれに全く気付かなかった自分に腹が立っていた。それなのに俺だけ幸せになっていいものか？

なら、今こいつを幸せに出来る言葉は……。

佐々木……家庭教師になつてくれないか？

キヨン……。

今の俺じゃ大学どころか卒業も危ういし、お前ならおふくろも安心するしな。

それに……

俺も佐々木と同じ大学に行ってまたあの頃みたいにお前の話を聞きたい。

佐々木が俺に向かつて飛び付いて来た。俺は佐々木を抱きしめた。もう離すかよ。どんなに苦勞してもお前と同じ大学に行つてやる。だから今は会う時間も少ないが大丈夫か？

「構わない。少しでも会えるならそれだけで十分さ」

俺は初めて佐々木を女の子として意識した。今さら考えたら佐々木ってかわいいんだな……。身近過ぎて分からなかった。世の男どもはさぞかし俺を恨んでただろうな。

「それじゃあ、契約をしよう」

佐々木は俺の体から離れるとそう言った。

「契約？」

「そうだ。今の約束を撤回しないためにね、君なら根をあげそうだし」

おいおい、ずいぶんと信用がないんだな。

「念のためだよ。それで僕の気持ちに済むんだ」

佐々木が落ち着くなら構わんぞ。

「そうか」

佐々木は優しく微笑むと……

契約ってキスのことか……。

唇が離れると佐々木は頬を赤らめていた。

「お前にもそんなかわいいところがあったんだな」

「なっ……！」

佐々木はまるでゆでダコのように耳の先まで赤くしていた。まさか言われ慣れしていない？

俺は少しいたずらをしたみた。

「佐々木、大好きだぞ」

その後の佐々木の反応はご想像にお任せする。

く終わりだよく

第5話 佐々木ver（後書き）

佐々×キヨンですね♪

分裂を読んだ時は、佐々木に惚れましたね～。しかし、アニメの影響はすごいですね、ハルヒに落とされました笑

まあ、佐々木は変わらず大好きなのですが、佐々木のことめがつさ大好きなケイイチさんがいらっしやるのでお譲りすることになりました。

佐々×キヨン書かせたらもうね……死にます（甘すぎて）

mixiでしか、読めないのが残念ですね。涼宮ハルヒのSSコミュ、その他にも良作、神作がありますのでmixiやられてる方はぜひ

やられていない方はこれを機にぜひご登録して読んでみて下さい
^^

次は、キヨンじゃなく藤原視点になります。残り2人、次はどちらになるかお楽しみ下さい♪

第5話 橘ver（前書き）

ここからは藤原視点です

第5話 橘ver

涼宮たちを見送った後、僕たちは新しいマンションに向かっていった。僕がこつちに来てから引越したところは橘がいたところより広く一人づつ部屋もあった。お金はこつちで稼いだので事足りた。前を歩く二人を僕は後ろから見つめていた。まさかまたこいつらと一緒にいれるなんて夢にも思わなかった。僕は未来を自分自身で変えたのかも知れない。こつちに来る前、橘たちに出会う前の未来なら僕はこんな気分を味わうことなく人生を終えていたのかも知れない。

今の僕はあの時の僕なんだろうか？知らない間に僕は僕じゃなくなっているんじゃない……。

答えはYESだ。

だって、今の僕はB1103じゃなくて、藤原航佑だから新しい僕でいいだろう。

そしてその新しい僕に変えてくれたのは……。

前で九曜と手を繋ぎながら九曜に話しかけているツインテール超能力者に目をやった。ホント、こんなに人に人生を振り回されるとは思っても見なかった。涼宮ハルヒほどではないけどこいつも相当パワフルだぞ。古泉と橘が入れ替わってたら……どちらかのSOS団は壊滅してただろうな。

「藤原？何立ち止まってるの？」

「航佑——どうかした——……？」

少し考え深すぎたようだ。僕は立ち止まっていた。

「何でもない」

僕は二人に向かって歩き、二人が僕の左右に並んで歩いた。

「ねえ」

橘が裾を引つ張って来た。

「何だ？」

「あたしは航佑って呼んじゃだめ？」

「はあ？何で？」

「だって、九曜はさっき航佑って呼んでたじゃない！あたしも呼ぶ
！！」

橘は子どものわがままのように言った。

「ダメだ」

「何で！？」

「何でも」

「ケチ！」

頬を膨らませながら、裾を強く引つ張って来た。

「ケチで結構」

「じゃあ、航佑かふじにやんどっちがいい？」

「ちよつと待て！何でそうなるんだ？」

「何でも！」

もはや、ここまで来ると駄々をこねているだけだ。

「おかしいだろ」

「おかしくない！どっち？」

くっ、あの女が余計なあだ名をつけなければ……。

「それに名前なんてただの記号なんでしょ？なら航佑でもいいじゃない」

「記号じゃない」

「えっ？」

僕が少し声の質を変えたせいか、橘の勢いが弱まった。

「名前は付けてくれた人の愛情の証なんだろう？」

「そ、そうだけど」

「なら、藤原も航佑もあんたがくれた愛情の証なんだろう？だったら

藤原でもいいじゃないか？」

僕はそう言って足を早めた。

危ない。危うく本音が出そうになった……。上手く誤魔化したつもりだけど――。

結局、この後の会話はなく帰った後はいつもと変わらない日常が流れた。

僕が部屋に入るなり電話が鳴った。携帯を開くとそこには『国木田達』の文字が映し出されていた。

「何だ？」

『何だ？とは愛想がないね』

「用件は？」

『相変わらずだね。定例報告だよ。今日の活動をまとめて送って欲しいらしい。今から来れる？』

「分かった。今から向かう」

僕は電話を切り部屋を出た。キッチンからは水が流れる音と食器が触れ合う音がリビングまで聴こえていた。

僕が玄関で靴の紐を結っている時に後ろから声が聞こえた。

「出かけるの？」

声の主は橘だな。おそらくまたプーさんのエプロンでもしてるんだろ。

「ああ、生徒が分からないところがあるから見て欲しいんだとさ」

一応、橘には家庭教師をしていることは言っている。

「遅くなる？」

「分らない」

「早く帰って来てね」

「ああ」

そう言って僕は玄関を出た。

僕はいつもの小高い丘に向かった。迎えが来るからな。迎えの人はすでに待っていた。

「こんばんは」

「こんばんは、朝比奈上官」

朝比奈は長い髪をなびかせながら優しい笑みを浮かべていた。

「じゃあ、行きましょう」

そう言つと僕のTPDDに時間平面移動のシグナルが鳴った。素早く目を閉じグラツとする感覚を味わった。

足に地を着いた感触が来たので僕は目を開けた。そこは見慣れた部屋であり、目の前には勉強机に肘を置き、椅子に座ってこちらを見ている達がいた。

「こんばんは、朝比奈さん、航佑」

相変わらず無垢な笑顔だな。

「こんばんは、国木田くん。では、早速始めますか」

「不可視遮音フィールドを展開します」

こうして、定例報告が始まった。いつもは玄関から入るんだけど遅い時間帯の時や緊急の時は朝比奈が迎えに来る。

「じゃあ、藤原くんの方は異常がなかったのね」

「後は、九曜が知ってるだろ」

「そうね。国木田くんの方もそれで漏れはない？」

「はい、録画も合わせて送りますか？」

「ええ、願いますわ」

わざわざ監視にはそこまでしなきゃいけないのか？

「僕らTEFIは録画機能も備わっているからよく情報源確保のためとして使用するんだ」

と言うことは僕のことまで録られているのか？

「この時間平面上のデータは滅多に削除しないから仕方ないよ」

そう言つた国木田は何かを知っているような顔で笑っていた。ばつが悪いな――。

「じゃあ、二人共引き続き調査にあたつて下さいね」

「了解」

そう言つたり朝比奈と僕は国木田の部屋から僕のマンションの近

くに移動した。

「じゃあ、佐々木さんの監視引き続きお願いします」

「ああ」

「今日の市内探検ツアー楽しかった？」

「出来ればもうやりたくないね」

「あなたらしい答えね」

朝比奈はクスクスと笑った。

「でも、たまにはみんなじゃなく彼女との時間も作ってあげてね。彼女色々悩んでるから」

そう朝比奈は意味深な発言を残し未来へ帰っていった。

俺も帰宅の途に着いた。時間は既に日曜日さすがに全員寝てるだろうな。

僕は二人を起こさない様にそつと玄関のドアを開けた。こういうことは訓練生の時に散々やらされたおかげで音一つたてずに開け閉めが出来る。本当に悲しい技だな。

しかし、僕の予想は大きく外れリビングからは声が聞こえドアに様々の色が代わる代わる映っていた。

消さずに寝たのか？ため息を一つ入れて僕はリビングに向かった。ドアを開けると確かにテレビは付いていた。しかし、テレビの前で三角座りをしているやつがいた。

僕は照明のスイッチに手を伸ばした。

「テレビを見る時は部屋を明るくして離れて見てねってよく言われてるだろ、橘」

ツインテールがピコツと動き橘は振り向いた。

「お帰り、遅かったね」

「ああ……ん？どうした？元気ないな。遅くまで暗いところでテレビを見てたからだろ」

「かも知れない」

そう言った橘はテレビに目を戻した。テレビに映し出されていた

のはスポーツ番組、橘が興味ないのは知っている。おかしいな……。

「ほら、これ飲んで寝ろ」

僕はホットミルクを作ってやった。

「ありがとう。藤原が優しいなんて明日雨が降るかも」

「ふん、さっさと飲んで寝ろ」

二人で並んでテレビをただ眺めていた。テレビを付けているからまだ落ち着くがこれが付いてないなら間違いなく静寂が僕らを支配している。

それよりも先にホットミルクを橘が飲み終えたおかげで何とか事なきを得た。

「洗つとしてやるから先に寝てろ」

「ありがとう」

僕はカップを2つ持ってキッチンに向かおうとした時だった。

「あたしね……」

橘が僕にそう投げ掛けて来た。

「どうした？」

「あたしね、見ちゃったんだ」

「何を？」

「藤原がさっきまで誰と会ってたか……」

危うくカップを落としそうになるのを何とか持ちこたえカップを流し台に置いた。

「出かけた後に生徒に呼び出される回数が多いよね？始めは勉強熱心な生徒に慕われてるんだって思ってたんだけどちょっと怪しくなってるね。それで今日藤原のあとをつけたの」

油断していた。こいつの尾行にすら気付かないなんて……。

「そしたら、綺麗な女性と会ってた。しかも、突然消えた……彼女いたんだ」

とりあえず、上官に報告だな。TPDDの通信システムを起動した。

（藤原くんどうかした？）

（僕たちがTPDDで国木田宅へ移動したところを橘京子に見られた）

（うそ……あの時間帯あそこには誰もいないんじゃない）

（どうやら、僕を怪しんでつけてたみたいだ）

（なるほど……）

（どうする？）

（……悲しいことだけど木田さんに連絡して対応を）

（分かった）

（藤原くん）

（何だ？）

（出来る？）

（僕は監視員だ。やるよ）

（そう……無理しないでね）

ここで通信は切れた。

「橘」

「何」

通信中も橘の泣き声が聞こえていた。今はしゃっくりも混じっている。鼻水まで出てるぞ……。

「確かに話してなかったのは悪かった……」

僕はあの女が朝比奈（大）であること、家庭教師は定例報告のこ
とを伝えた。

「……未来の情報を伝えるのはこの時間平面上のやつには最小限に
したい。だから今まで黙ってた」

しゃっくり混じりの泣き声も少しは落ち着いていた。

「みくるさんあんなにキレイになるんだ……」

「ああ、俺も驚いた」

僕はTPDDの通信システムを再び起動させた。

（どうしたの？）

（禁則事項に触れた）

（……見られたの？）

（ああ、二人でそっちにいった時）

（……相手は？）

（橘京子）

（……西原さんから暗号通信が来た……分かった。場所はマンション？）

（ああ）

（もうすぐ行く）

通信が切れた。

「橘」

「何？」

「実はな、僕たちはTPDDで移動しているところは誰かに見られ
ては行けないんだ」

橘は無言で僕を見つめていた。

「そして、見られた場合選択肢が2つある、自分が罪を背負うか見
られた人を消すか」

僕はキツチンから果物ナイフを持ち出した。

「僕は断然後者だ……」

「分かってたよ」

橘はナイフを見つめ微笑んだ。

「だから言わないでおうと思った。でも、藤原に隠し事はしたく
なかったから……」

微笑んだ橘の瞳から涙が溢れていた。

「最後に言い残すことは？」

「みんなにサヨナラって伝えて」

「分かった」

「後……」

航佑、大好きだった」
「僕もだよ……京子」

………

………

ドサッ

「ホント、見事に気を逸らしてくれたね。君が好きな彼女にとって
はこれ以上ない作戦だよ」

橘は俺の胸の中で眠っている。後ろから国木田が麻酔弾を撃つたらしい。

「でも、良かったね。今は僕たちがいるから情報操作で済むけど、
昔なら本当に殺さないとヤバかったよ？」

「その時は俺が罪を被った」

「『俺』になってるよ。後、涙拭いなよ」

気が付けば涙が頬をつたってフローリングに落ちていた。

「本当にいいの？」

「ああ……」

俺は背を向け壁に肘を置き頭を支えた。

「じゃあ、不可視侵遮音フィールドを展開するよ。展開した後情報操作に入るから」

俺は何も言わなかった――。

「終わったよ」

国木田の声に振り返ると橘は無防備な寝顔に静かに寝息をたてていた。

「今晩は航佑の帰りを待ってて気が付いたらここで寝たことにしていたから」

「助かる。九曜は？」

「彼女も承諾してくれた。自分で書き換えるみたい」

「そうか、悪いな」

「それは九曜さんに言っで。それから……」

言われた通り橘京子が抱いていた君への感情もリセットしたよ。全部じゃ厳しいから仲の良い友達で止めといた。

それに伴って、西原さんから君に任務遂行により未来へ帰還命令が出たよ」

そうか、俺の任務事項は橘の感情によるものだったんだ。

「君が戻っても問題ないと判断されたみたいだね。もうすぐTPD使用制限の解除を行うみたい」

その言葉と同時に使用制限が解除され最優先事項コードが表示された。

（任務事項遂行により帰還せよ）

「了解。これより帰還します」

「君は、彼女よりも監視員である道を選んだんだね」

「未来人を好きになって得などない。必ず別れが来るんだからな」
「強くなったね。航佑」

強くなったんだろ……僕には逆にしか思えなかった。

そう、僕はその禁忌に逆らうことが出来ず流された人間だ……。

「じゃあ、僕も帰るね」

「ああ、呼び出して悪かったな。調査頑張れよ」

「後、一年半ぐらいだけだね」

国木田は笑みの残像を残し消えた。僕は目の前で寝ている橘に目を移した。

また会えるさ、そんな気がする。

だから、サヨナラよりも良い言葉がある――。

僕は橘の頬に優しくキスをした。

（時間移動開始）

僕は目を閉じた。その瞬間グラッとした感覚が僕を襲った。

行ってきます――。

く終了ですく

第5話 橘ver（後書き）

はい、橘×藤でした。そして、こんな終わり方。

キヨンは未来と言う壁を乗り越えようとした。しかし、藤原は調査員である立場（ある意味しからみ）によって悲しい選択を選んだ。恋愛はいつだって成功するばかりじゃないんか？と思うとこんな感じになってました。

しかも、この二人ますたあがどんなに続きを書いてもハッピーになつてくれないんです；；

だから、もうこのまま（笑）

次がラスト！彼女だよ！

第5話 九曜ver

九曜（大）が言っていた。

『私は私でなくなる』

それはエラーが原因であり、そのエラーは僕という時に発生する。九曜は僕が苦手意識を持つ者に自らを作り変える。色々考えを巡らせてもいつも結論は同じだった。

九曜は僕のが好き。

僕は橘のことが好きだし、九曜も好きだ。

二人を好きな僕はどうすればいいんだ？

「藤原？何立ち止まってるの？」

「航佑——どうかした——……？」

少し考え深すぎたようだ。僕は立ち止まっていた。

「何でもない」

僕は二人に向かって歩き。二人が僕の左右に並んで歩いた。

「ねえ」

橘が裾を引っ張って来た。

「何だ？」

「あたしは航佑って呼んじゃだめ？」

「はあ？何で？」

「だって、九曜はさっき航佑って呼んでたじゃない！あたしも呼ぶ
！！」

橘は子どものわがままのように言った。

「ダメだ」

「何で！？」

「何でも」

「ケチ！」

頬を膨らませながら、裾を強く引つ張って来た。

「ケチで結構」

「じゃあ、航佑かふじにやんどつちがいい？」

「ちよつと待て！何でそうなるんだ？」

「何でも！」

もはや、ここまで来ると駄々をこねているだけだ。

「おかしいだろ」

「おかしくない！どつち？」

くっ、あの女が余計なあだ名をつけなければ……。

「それに名前なんてただの記号なんでしょ？なら航佑でもいいじゃない」

「記号じゃない」

「えっ？」

僕が少し声の質を変えたせい、橘の勢いが弱まった。

「名前は付けてくれた人の愛情の証なんだろう？」

「そ、そうだけど」

「なら、藤原も航佑もあんたがくれた愛情の証なんだろう？だったら藤原でもいいじゃないか？」

僕はそう言つて足を早めた。

ふと九曜の顔が視界に入った。いつもと同じに見えたがどこか寂しそうに思えた。

結局、この後の会話はなく帰った後はいつもと変わらない日常が流れた。

僕は国木田から定例報告の呼び出しを受け、小高い丘で朝比奈（大）と合流し国木田宅へ移動した。

定例報告後は朝比奈（大）にマンションまで送ってもらった。

「でも、たまにはみんなじゃなく彼女との時間も作ってあげてね。彼女色々悩んでるから」

そう朝比奈は意味深な発言を残し未来へ帰っていった――。

僕も帰宅の途に着いた。時間は既に日曜日になっているからさすがに二人とも寝ているだろうな。

僕は二人を起こさない様にそつと玄関のドアを開けた。こういうことは訓練生の時に散々やらされたおかげで音一つたてずに開け閉めが出来る。

本当に悲しい技だな。

しかし、僕の予想は大きく外れ玄関には人が立っていた。

「く……よう……」

黒々とした瞳は暗闇でもはっきりと確認でき、なおかつ黒一色のこいつは暗闇と同化していた。黒一色の風景に黒一色の自分を映し出すなんてある意味存在感あり過ぎたる。

「お帰り——……」

九曜はまるでホラー映画に出て来る執事のように不気味に呟くとリビングに向かって歩いていった。歩くなら足音ぐらいつけて歩いてくれ生きてる心地がお前から感じられない……。

九曜はふと立ち止まり振り返った。言葉は発せずただ暗闇から2つの瞳を浮き出させていた。

ついて来いってことか？

そうなのかそうでないかのわからないまま九曜は再びリビングに向かって歩いていった。僕はとりあえず、靴を脱ぎ九曜のあとを追った。

リビングに入ると九曜の姿はなくキッチンの電気が付いているところからみると九曜はキッチンにいるんだろう。

「何をしてるんだ？」

「座って——」

九曜に言われるまま座って待つておくことにした——。

しばらくすると九曜が持つて来たのは、急須、湯飲み、漬物、鮭、ご飯……まさかお茶漬け？

九曜は僅かに頷いた。

「お前が作ったのか？」

「調理行程が——簡単——かつ胃に——優しい——食べて——……」
せつかくだからいたかくことにした。簡単とは言え美味しいな。サラサラと食べれるのはありがたい。

ふと九曜に目をやるとお茶を飲んでいた。その姿は人間的で愛くるしく思えた。こいつも人なんだな。

「ごちそうさま」

キレイに漬物まで完食した僕はお盆に全部まとめて持って行こうとした。すると九曜がおもむろに立ち上がり手を出して来た。

「いい——……私が——やる——」

「いや、作ってくれたんだから持って行く」

「構わない——」

口で言い負かすのは得意だがこう無言で見つめられるやつとやりやったことがない目は口ほどに物を言うだな。

結局、僕は九曜にお盆を渡した。

九曜は受けとるとからくり人形のようにぎこちない動きでキッチンに運んでいった。

おかしい……いつも無駄を省き過ぎて動くことじたいしない九曜から考えられないくらい無駄な動き
まるで子どもがお母さんの手伝いをし……って！

こんな時動きがスローモーションになるよな。目の前で足をもつれてお盆から茶碗やらなんやらが見事に宙を浮いている。

って、何暢気に解説してんだ！九曜！！

………

……

ガシャンっ！

パリッ！

………

……

まあ、見事お盆に乗っていた茶碗や湯飲みは原形が分らないくらいキレイに割れたが僕をマットにしたおかげで九曜は守ることが出来た。

「……」

いつも無言だが驚いているのが分かったぐらい九曜の鼓動は早く僕の体を揺さぶっているみたいだ。宇宙人だからひょっとして動力はエンジンなのかと思ったが作りは同じ人間なんだな。

だとしたらこいつは人間らしさがあって当然だ。

「航佑——…」

「あつ悪い。苦しかったか？」

僕が九曜から離れようとあいつの背中に回してた手を外そうとした。

「イヤ！」

九曜に拒まれた。

「このままいたいのか？」

九曜はこれまでに見たことないくらいはつきりと頷いた。

「ダメ——……？」

おい、天蓋領域の親玉、こんなにかわいく出来るならはなからそう九曜にさせておけよ。

少し潤んだ瞳で首をかしげたその仕草。不覚にもかわいいと思っ
てしまったじゃないか……。

この頼まれ方をして断れるやつは恋愛する資格ないぞ。

それぐらい九曜はかわいかった。そんな九曜を前に僕の鼓動は早
くなった。

「心拍数が——上がってる——」

ほら、見る。気づかれたじゃないか。だから首をかしげる……な。

「顔も赤い——体温も上昇——している——呼吸も——乱れ——てい
る——風邪の症状に——類似——」

「風邪は引いてない……だ、大丈夫だから（早く離れてくれ……耐
えれない……）」

そんな思いも九曜には届かず首を横に振った。

「疑いがある——確認する——」

そう言うなり顔を近づけて——。

コッ

ボタン

……

僕は限界だった。さて、あいつは僕に何をしたと思う？宇宙人な
ら絶対あんなことしなくても熱測れるだろ……。

そう、九曜はおでこをつけて来たんだ僕のおでこに。どこで覚え
たんだ？

テレビか橘か学校か。いずれにしてもあれは反則だからもつやらないような言わないとな。第一他の男にでもしたらそれこそ……。

それこそ？

僕がそいつをどうかしてしまつよ。

ナゼ？

それはして欲しくないから

航佑にならしてもいい？

他の人にしないか？

しない

ならいい

わかつた……航佑？

何だ？

大好き

……僕もだ

ホント？

ああ

嬉しい……

はにかんだ九曜もかわいいぞ

航佑……

何てリアルな夢だ。キスの感触まであるんだな……。

感触？

ガバツ！

……

僕は気がつけば布団の中にいた。よく見れば服も着替えていた。

「ゆ、夢か……」

こんな夢をみるなんて僕もとうとう変人扱いだな……。髪の毛をクシャツと手でしてみるのが逆に夢をパズルのように鮮明に浮き上がって来た。

やべえ、夢がリアル過ぎて恥ずかしい……。

九曜の顔見る自信がない……。

そんな願いもむなしくノブを回す音が聞こえ、少し開いた隙間から僕を覗く黒々とした瞳と目があった。

恐る恐る入ってくると九曜は優しくドアを閉めた。僕はその一部始終を顔をそむけ目だけで追った。

「京子が——見て来て——って——体調——どう——？」

「あ、ああ」

「ぎこちない。しかもよくみたらこいつもうつむいてる。」

「お互いの意識しあっているせいで変な空気が漂っていた。」

「昨日——帰って来て——航佑が——風邪引いてて——それで——

……」

「そ、そうなのか？」

「じゃあ、あのお茶漬け作ってくれたのも全部夢？だとしたらますます恥ずかしいんだが。」

「京子に——知らせてくる——」

先にこの空気に耐えられなくなったのは九曜で足早に部屋を出ようとす。その瞬間長い黒髪はなびき甘い優しい香りが部屋に包んだ。

その時九曜の髪から何か飛んできて布団に落ちた。僕はそれを指でつまみ手のひらに乗せた。

これは……！

僕はベッドから飛び起きるとキッチンに向かった。キッチンには橘が朝食の準備をしていた。

「あっおはよー体調は大丈夫……」

「僕の茶碗は！？」

「えっ！な、何！？」

「いいから！どこだ！？」

「食器洗い機の中だけ……」

僕は食器洗い機を開き茶碗を取り出し注意深く眺めた。

「な、何？どうしたの??」

状況が飲み込めない橘を他所に僕は茶碗にあるアレを探した。

「やっぱり、ないか……」

諦めかけ茶碗をひっくり返した……。

「あつた！」

僕はさっきの欠片をその部分にはめてみた。

「ぴったりだ……」

そう、つまり昨日の出来事は本当にあつたことだったんだ。

「ねえ？どうしたの！茶碗なんか見てニヤニヤして」

橘の質問に僕は何も答えず、この騒動にさも興味がないかのようにふるまっているやつのところへ向かった。

「……何？」

「別に」

「そう……」

「なあ」

「……何？」

「またお茶碗漬け作ってくれ」

しばらく間があつた後、九曜は少しだけ頷いた。

後、今度キスする時は僕が起きてる時な

今度は——航佑から——……して欲しい……

その後、朝食を持って来た橘に「まだ熱あるの？顔赤いよ？って九曜もじゃない！！」と言われた。

さて、誰かていのいい言い訳を代わりに考えてくれ。僕の頭の中はさっきの言葉で頭がいっぱいだから。

）——終わり——……）

第5話 九曜ver（後書き）

いかがでしたでしょうか？本編と含めて約15万はあるのかな？？
当時、これを携帯で書いていたと思うと……。しかも、毎日更新
（笑）あの時の情熱はどこへ行ったのでしょうか？

まず、これを書く時に一番悩んだのが七者七様の恋愛オチを考えなければいけなかったところです。キャラの個性を最大限に活かしながら、目の肥えた読者に2828してもらおう作品を作るのはめっちゃ悩みました。しかし、個人的にはよく書いたなとあるいみ達成感が持てました。

再びこれを転載しながら読んでいると、やっぱり続編を書いてみたいなと思い、書き出してみました。

しかし、今は執筆よりも仕事の方に時間を取りたいので、少し厳しいかも知れません。

それも書きながら、また過去に書いた作品を転載していきたいと思います。

ここまで、お付き合いいただきありがとうございました。

また、だれがよかったと感想をいただけると幸いです^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7494k/>

藤原の陰謀～筆休め～

2010年10月8日14時15分発行